

埋蔵文化財調査報告書92

高藏遺跡（第61次・第62次）

正木町遺跡（第22次）

春日野町遺跡（第6次）

2021

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は 2020・2021 年（令和 2・3 年）に名古屋市教育委員会が実施した、市内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した発掘調査は、高蔵遺跡（第 61 次・第 62 次）、正木町遺跡（第 22 次）、春日野町遺跡（第 6 次）であり、その概要是以下のとおりである。

高蔵遺跡（第 61 次）

調査期間 令和 2 年 6 月 29 日から令和 2 年 7 月 30 日
調査位置 名古屋市熱田区高蔵町 202 番 2
調査面積 44m²
担当者 林順 水野裕之

高蔵遺跡（第 62 次）

調査期間 令和 3 年 1 月 25 日から令和 3 年 2 月 27 日
調査位置 名古屋市熱田区高蔵町 202 番 2
調査面積 53m²
担当者 水野裕之 林順

正木町遺跡（第 22 次）

調査期間 令和 2 年 7 月 8 日から令和 2 年 7 月 29 日
調査位置 名古屋市中区正木 1 丁目 1309 番 3
調査面積 38m²
担当者 安田彩音 片桐妃奈子

春日野町遺跡（第 6 次）

調査期間 令和 2 年 10 月 12 日から令和 2 年 10 月 22 日
調査位置 名古屋市南区貝塚町 11 番 9、60 番
調査面積 50m²
担当者 片桐妃奈子 繩繩茂

- 3 調査に関する事務及び現地調査は、名古屋市教育委員会文化財保護室が担当した。
- 4 本書の執筆は各調査担当が行った。その分担は以下の通りである。
高蔵遺跡（第 61 次） 林、高蔵遺跡（第 62 次） 水野、正木町遺跡（第 22 次） 安田、春日野町遺跡

- (第6次) 片桐、なお、全体の編集は安田が行った。
- 5 調査の記録や遺物の整理作業は、調査担当者の他、安藤明子、上田玲子、小川敦子、小浦美生、酒井史子、仲間理恵、米倉由佳が行った。
 - 6 本書で示す方位、座標は国土座標第VII系（世界測地系）によっており、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。
 - 7 調査の記録、調査遺物等は名古屋市教育委員会が保管している。

目 次

高藏遺跡（第 61 次）	1 ~ 28
第 1 章 遺跡の位置と環境	3
第 2 章 第 61 次発掘調査の成果	7
高藏遺跡（第 62 次）	29 ~ 48
第 1 章 経過	31
第 2 章 調査の方法と成果	31
第 3 章 まとめ	46
正木町遺跡（第 22 次）	49 ~ 60
第 1 章 位置と環境	51
第 2 章 調査の経緯	52
第 3 章 調査の内容	53
第 4 章 まとめ	58
春日野町遺跡（第 6 次）	61 ~ 70
第 1 章 遺跡の位置と環境	63
第 2 章 調査の経過と方法	64
第 3 章 調査の成果	67
第 4 章 まとめ	68

高蔵遺跡（第 61 次）



目 次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 位置と環境	3
第2節 調査の歴史	5
第2章 第61次発掘調査の成果	
第1節 調査の経過	7
第2節 基本層序	9
第3節 遺構	9
第4節 遺物	17
第5節まとめ	20

挿図目次

第1図 名古屋市の地勢と高蔵遺跡の位置	3
第2図 第61次調査地点位置図	3
第3図 高蔵遺跡周辺の遺跡	4
第4図 調査区周辺図（高蔵遺跡北部）	6
第5図 作業前の状況	8
第6図 作業状況	8
第7図 作業状況	8
第8図 埋め戻し	8
第9図 調査区平面図	10
第10図 各壁面の名称	11
第11図 土層断面図（1）	11
第12図 土層断面図（2）	12
第13図 4次調査で出土した鋳型と思われる 破片	14
第14図 ピットの配列から復元される掘立柱 建物	16
第15図 出土遺物	19

表目次

第1表 これまでの調査	6
第2表 ピット一覧表	15
第3表 遺物観察表	18

図版目次

図版1 完掘写真	
図版2 SD01	
図版3 西半区の壁面	
図版4 東半区の遺構	
図版5 東半区の遺構と壁面	
図版6 出土遺物（1）	
図版7 出土遺物（2）	

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と環境

名古屋市の地形は、市域中央部に南北方向に延びる台地、その西方および北方に広がる沖積平野、および市域東部の丘陵部に大別することができる（第1図）。このうち、台地は今から約6万年前に堆積したとされる熱田層からなるが、特に名古屋城を北西端とし、熱田に向かって南方向に延びる半島状の突出部は熱田台地と呼称されている。高蔵遺跡は、この台地の南端近くの東縁部に位置し、標高は7～10m、遺跡範囲は東西500m、南北700mにおよぶ。

高蔵遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓や住居址を主体としつつも、縄文時代から中世に至るまで遺構や遺物が検出されている複合遺跡である。高蔵遺跡の近郊では、南側には縄文時代の墓・貝層や弥生時代の大溝などが見つかった玉ノ井遺跡、弥生時代の土器が採集された森後町遺跡などが所在する。また、南方約150mの地点に所在する、東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳は、そのすぐ南方に位置する白鳥古墳と合わせ、古墳時代の有力氏族である尾張氏の墓とされている。一方、目を北側に転すると、高蔵遺跡のものと同様な小型の方墳が見つかっている東古渡町遺跡、古墳時代から古代にかけての集落跡である伊勢山中学校遺跡や金山北遺跡、飛鳥時代創建の寺院跡である尾張元興寺跡などが分布している。

このように、熱田台地上、特に高蔵遺跡周辺の台地南部は、縄文時代以降、中世に至るまで、名古屋市域の中でも極めて高密度に遺跡が分布する地域であり、遺跡の種類も集落遺跡、古墳、寺院など多岐におよんでいる。古代以降についてはまだ不明点も多いものの、この地は人々の生活拠点・宗教拠点あるいは精神的な拠点として、長期間にわたり活用されてきたと言える。





第3図 高蔵遺跡周辺の遺跡

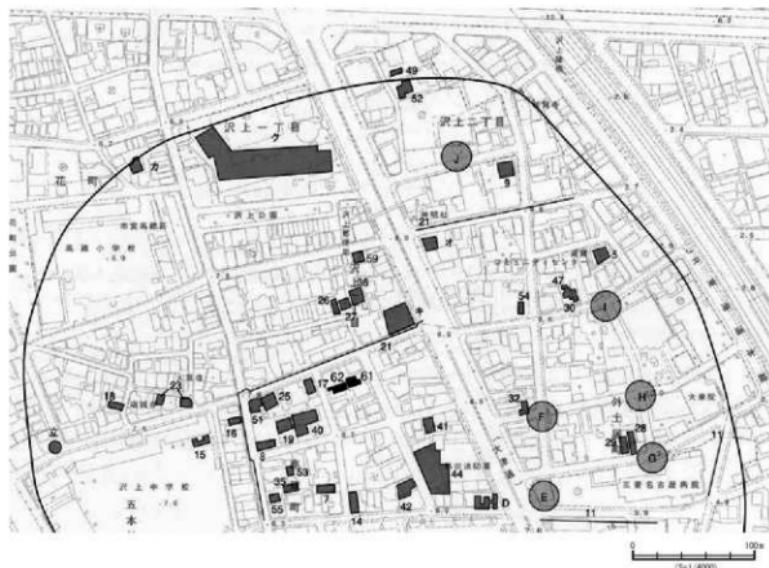
第2節 調査の歴史

高蔵遺跡は、明治31年の齊藤恒氏による石器採集の報告を嚆矢として、様々な組織および個人により調査が行われている。1981年以降は、名古屋市教育委員会が主に調査を担当しており、住宅建設などに伴い、これまで60次にわたって調査を行っている。遺跡範囲が主に住宅地に広がるため、1回の調査の成果には限界があり、遺跡の全体像を把握するのは困難であるが、少しずつその実態が明らかになっていく。以下に、時代ごとに今までの調査で分かってきたことを、主に遺構の様相を中心として簡単にまとめておく。

弥生時代は、前期から後期にかけて活動の痕跡が明瞭に認められる。前期は、遺跡東部の台地縁辺上で行われた調査で環濠と思われる6条の溝が見つかっており、この東側にあったと思われる居住域を取り囲んでいたと思われる。続いて中期になると、高蔵公園の北東部で環濠と思われる溝が検出されているほか、中期後半を中心として、竪穴住居・方形周溝墓などが遺跡内の各所から見つかっている。そして、後期はこれまでに検出された遺構・遺物の量が最も多い時期であり、主に竪穴住居や方形周溝墓が見つかっている。竪穴住居は、遺跡の北東部と南西部でそれぞれ見つかっているが、このうち南西部の第34次調査地点では、竪穴住居が大型のものを含みつつ密集し、中国製の鏡である虺龍文鏡の破鏡が出土するなど、居住域の中でも中心となっていたと思われる。一方、方形周溝墓は遺跡内の南西部を中心として広い範囲から見つかっている。また、居住域を取り囲むと思われる環濠は、これまでの調査でも遺跡の北部を中心として検出されていたが、平成28（2016）年・平成30（2018）年に行われた高蔵公園の整備に伴う試掘調査・立会調査において、東西方向に約100mにわたって延び、高座結御子神社を囲むように、その西側で南へ大きく方向を変える環濠が検出されている。総じて、弥生時代は、遺跡の東側から南側にかけての台地縁辺部が居住域として利用され、西側には墓域が形成されていたと考えられる。

続いて古墳時代は、住居址と古墳が築かれているが、このうち住居址については、弥生時代と同様に東部の台地縁辺部で少し検出されている程度である。一方、古墳の検出には目覚ましいものがあり、前期初頭・中期後半～後期前半を中心として、遺跡の西部を中心として方墳が多数築かれている。このうち、前期初頭の方墳は、形態や規模、出土遺物の点で弥生時代の方形周溝墓との区分が明確ではない。また、中期後半～後期前半の方墳もいずれも小古墳であるが、尾張型の円筒埴輪を採用しており、ときに首長墳と同じ大型円筒埴輪を持つことから、その造営主体は尾張の大首長によって直接的に掌握された人々だったと考えられている（藤井2008）。更に、高蔵公園内および高座結御子神社境内では、墳丘が残存し、横穴式石室をもつ7世紀代の円墳がいくつか確認されている。特に、1号墳はその豊富な副葬品の内容などから、様々な地域との交流を行い、積極的に関係を取り結んだ首長の墓と考えられる。

古代以降の状況については、まとまった検出例は少ないものの、遺跡南西部で行われた第34次・第39次調査では7～9世紀頃の遺構・遺物が多く見つかるなど、遺跡南部を中心に成果が上がっており、徐々に人々の土地利用の状況が明らかになっている。



第4図 調査区周辺図（高蔵遺跡北部）

第1表 これまでの調査

調査年	調査主体	図中の表示	所在地
1951	田中稔	E	外土居町 12 (E 地点)
1953	南山大学（中山美司）	D	高蔵町 62 (D 地点)
1956	南山大学（稻垣晋也）	D	D 地点
1981	市教委 1 次	1	高蔵町 9-7
1988	荒木実	才	沢上二丁目 501
1993	高蔵遺跡（花町地区） 調査会（中嶋理恵）	力	花町 6-15
1993	市教委 5 次	5	沢上二丁目 704
1994	市教委 7 次	7	高蔵町 6-10
1994	市教委 8 次	8	高蔵町 1-17
1995	市教委 9 次	9	沢上二丁目 4-12
1995	市教委 11 次	11	外土居町
1996	市教委 14 次	14	高蔵町 5-18
1996	市教委 15 次	15	五本松町 4-4
1997	市教委 16 次	16	五本松町 503-1
1997	市教委 17 次	17	高蔵町 1-18
1998	市教委 18 次	18	五本松町 208-3
1998	市教委 19 次	19	高蔵町 110
1998	市教委 21 次	21	沢上二丁目他
1999	市教委 23 次	23	五本松町 3-8
1999	市教委 25 次	25	高蔵町 1-1
1999	静岡人類史研究所	キ	沢上一丁目 6-19
1999	高蔵遺跡調査会	ク	沢上一丁目 3
2000	市教委 26 次	26	沢上一丁目 621-1

調査年	調査主体	図中の表示	所在地
2000	市教委 27 次	27	沢上一丁目 6-28
2000	市教委 28 次	28	外土居町 5-13
2000	市教委 29 次	29	外土居町 5-14
2000	市教委 30 次	30	沢上二丁目 713
2000	立会調査（市教委）	立	五本松町 113、114
2001	市教委 32 次	32	外土居町 110
2002	市教委 35 次	35	高蔵町 617
2002	市教委 36 次	36	沢上一丁目 620-2、3
2002	市教委 40 次	40	高蔵町 108-2、109
2003	市教委 41 次	41	高蔵町 404
2003	市教委 42 次	42	高蔵町 507
2003	市教委 44 次	44	高蔵町 4
2004	市教委 47 次	47	沢上二丁目 713
2004	市教委 49 次	49	沢上二丁目 118-1
2005	市教委 51 次	51	高蔵町 101
2005	市教委 52 次	52	沢上二丁目 118-2
2005	市教委 53 次	53	高蔵町 602
2006	市教委 54 次	54	沢上町 511-1
2006	市教委 55 次	55	高蔵町 616
2013	市教委 59 次	59	沢上一丁目 611-4、611-5
2020	市教委 61 次	61	本報告書
2021	市教委 62 次	62	本報告書

第2章 第61次発掘調査の成果

第1節 調査の経過

第61次調査は、個人住宅の建築に伴い実施した。調査地点は熱田区高蔵町202番2の一部である。第61次調査地点は、遺跡範囲の中心部からやや北寄りに位置している。本遺跡の南西部は、弥生時代から古墳時代にかけて墓域として活用されており、長期間にわたって古墳群が形成されている。特に、本調査区のある街区の一つ西側の街区内では古墳が多く検出されており、第17・19・25次調査地点では埴輪や須恵器を伴う方墳の周溝が、第40次調査区では弥生土器を伴う方形周溝墓の周溝が検出されている。そのため今回の調査でも、新たな墳墓が発見される可能性が高いと考えられた。

調査の対象面積は44m²、現地での作業は令和2年6月29日から同年7月30日にかけて行った。調査は、排土を積み置く関係で、対象範囲の西側を西半区、東側を東半区と二分し、西半区→東半区の順に調査した。調査中、数多くの遺構が見つかったが、住居についてはSB、溝はSD、ピット（小穴）にはPを冠し、それぞれ01から順に名称を与えた。なお、西半区で検出された溝SD01については、溝の中央に北西方に向かって幅50cmの畦を残した上でその土層堆積状況を確認したが、その畦部分の土量が多いことを考慮して、SD01中に畦を残した状態のまま完掘写真を撮影している。SD01の完掘写真については、畦部分の断面図を作成したのち、西半区南側を少し埋め戻した上で撮影した。

調査日誌（抄）

以下のように、西半区は6月29日から7月16日、東半区は7月16日から7月30日にかけて調査を行った。

- 6月29日（月） 調査用資材搬入。調査区の設定。西半区よりバックホウによる表土掘削を開始。
- 6月30日（火） 調査区にコンパネを設置。
- 7月1日（水） 西半区の表土掘削を終了。人力による包含層掘削を開始。SD01を検出。
委託業者が基準点測量を実施。
- 7月2日（木） SD01を、土層観察用の畦を残しつつ掘り下げる。SD01中の畦北壁の土層堆積状況の写真撮影。包含層の掘削とピットの検出。
- 7月3日（金） 西半区北壁・西壁・南壁の写真撮影。ピットの掘り下げと遺構記録。
SD01中の畦北壁の土層断面図の作成。
- 7月8日（水） ピットの掘り下げ。南壁・西壁の土層断面図の作成。
- 7月10日（金） 水抜きと清掃。
- 7月13日（月） 清掃とピットの掘り下げ。
- 7月15日（水） 水抜きとピットの掘り下げ。北壁の土層断面図の作成。
- 7月16日（木） 平面図の作成。完掘状況の写真撮影。西半区の埋め戻しと転圧。
- 7月17日（金） 西半区の埋め戻しを終了。東半区の表土掘削を終了。人力による包含層掘削を開始。
SD02を検出。

7月20日（月） 包含層の掘削とピットの検出。SD03、SD04の検出。

7月21日（火） SD02～SD04とピットの掘り下げ。

7月22日（水） 水抜きと清掃。完掘状況の写真撮影。北壁の土層断面図の作成。

7月28日（火） 北壁・東壁・南壁の土層断面図の作成。東半区の埋め戻しと転圧。

7月29日（水） 調査区全体の埋め戻しと転圧。道具洗浄。

7月30日（木） 転圧。コンバネの撤去。



第5図 作業前の状況



第6図 作業状況



第7図 作業状況



第8図 埋め戻し

第2節 基本層序

今回の調査では、住宅を建築する範囲全域を調査するため、L字状に掘削を行った（第5図）。そのため、便宜上北壁のうち西側を北壁①、東側を北壁②、東壁のうち北側を東壁①、南側を東壁②とし（第10図）、その壁面の観察・記録を行った。

調査区のうち、溝などが掘り込まれていない部分の堆積は基本的に水平堆積であり、上層より表土層（厚さ0.3m）、にぶい赤褐色粘質土層（厚さ0.1～0.2m、灰釉陶器・中世陶器含む）、暗赤褐色粘質土層（厚さ0.1～0.2m、須恵器・弥生土器を含む）で明褐色粘質土層（熟田層）に至る。にぶい赤褐色粘質土層は古代～中世の包含層、暗赤褐色粘質土層は古墳時代以前の包含層と推定される。

ただし、南壁の表土層直下では、西側ではにぶい赤褐色粘質土層（6層）、東側では暗赤褐色粘質土層（4層）がそれぞれ1層分しか堆積していない。同じ色の土層が基本的に同時期に堆積したという前提に立つと、南壁付近では、まず調査区東側で後述する溝SD02が掘り込まれ、4層が溝の内外に堆積したのち、溝内部を残して地山面まで削平がなされ、その後6層が堆積した、という順序で土層が形成されたと考えられる。そして現代になり、調査区南壁付近の東側が水平に削平されながら表土層が形成されたと考えられる。

第3節 遺構

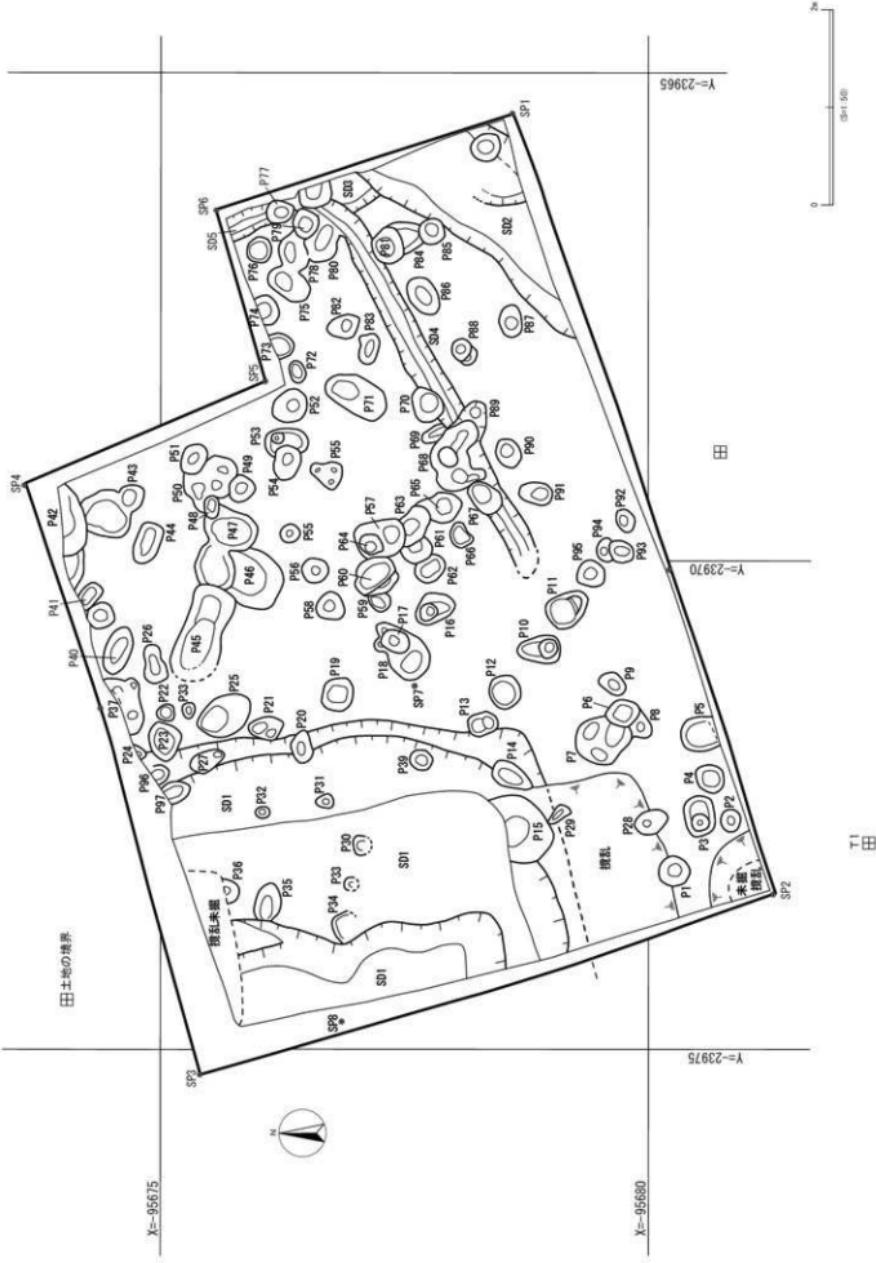
溝状遺構

全部で5条検出している。このうち、調査区東側で検出されたSD02～SD04には切り合い関係がみられ、SD03→SD02、SD04の順に掘削されたと考えられる。また、SD05についても、後述するようにSD04と一連の遺構であった場合、SD03より後に掘削されたと考えられる。

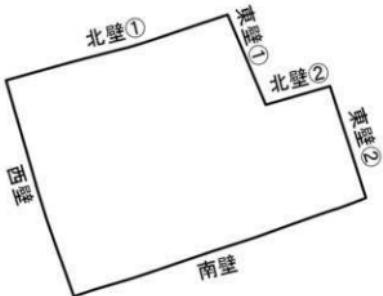
SD01

調査区西壁付近において、南北方向に検出された溝状遺構である。地山での検出長は約3.75mである。地山での検出状況では、西壁から2.5mほど東に行った地点で溝が浅くなつて途切れ、代わって西側に溝が延びていく様子が確認できるため、鍵の手状に折れ曲がる溝状遺構のちょうど南東部分を検出したと考えられる。ただし、SD01の南側の肩の部分は攪乱されており、本来は北側壁面で観察できるような溝の立ち上がりと同様、急な角度で立ち上がっていたと考えられる。SD01の地山面からの深さについては、溝の反対側の立ち上がりが調査区外にあるため最大深は不明であるが、調査区北西隅で1.2mに及ぶ。また、正確な幅も不明であるが、SD01のうち今回の調査区で検出した部分の西端を溝の中央部と仮定した場合、調査区内で3.0mを測るため、恐らく6.0m以上であったと考えられる。

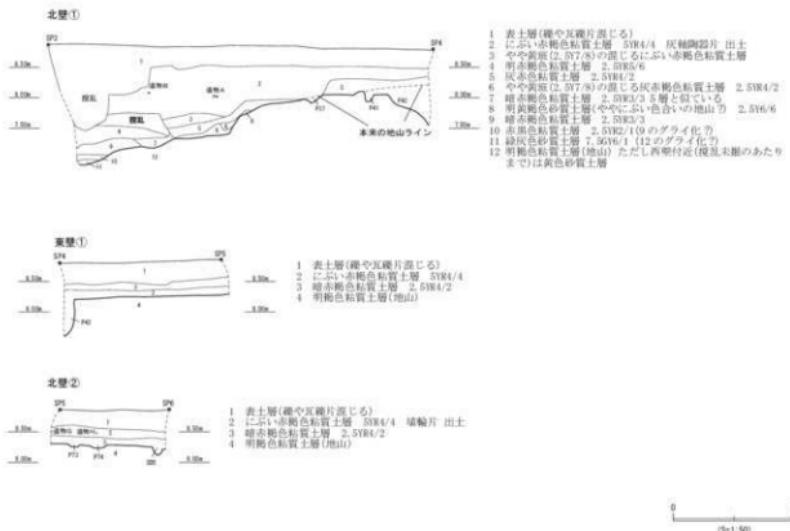
SD01を斜めに断ち削るようにして設定したセクションベルト（SP7～SP8）の観察では、埋土上層は灰赤色の粘質・砂質土層（1、2、3層）であり、埋土下層は黒褐色砂質土層・黒色粘質土層（4、7層）である。1層中からはわずかであるが須恵器片が出土している（第15図1、7）。また、埋土下層の土質に近い西壁の暗赤褐色粘質土層からも須恵器片（5）が出土している。SD01は、検出当初は大型の方形周溝墓あるいは古墳の周溝の南東隅であると考えていたが、埋土下層で検出された遺物が後述するように8世紀代のものであることから、方形周溝墓や古墳とは関係のない、井戸状の掘り込みであった可能性も否定できない。



第9図 調査区平面図



第10図 各表面の名称



第11図 土層断面図 (1)

東壁②



S001 駐北壁



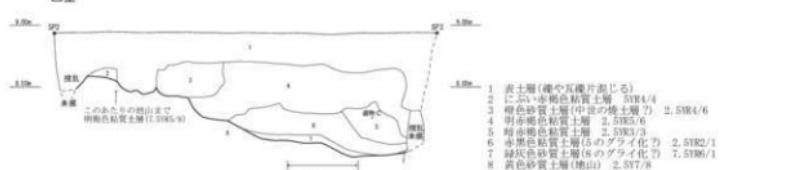
0 2m
(5:1.50)

南壁



1 表土層(礫や瓦礫片混じる)
2 灰褐色粘質土層(礫不現代のガラス混じる) 10SYR4/1
3 灰褐色粘質土層 2.SYR4/1
4 灰褐色粘質土層 2.SYR4/2
5 黄褐色粘質土層 10SYR4/1
6 にごい赤褐色粘質土層 SYR4/1
7 明褐色粘質土層(地山) 7.SYR5/8

西壁



0 2m
(5:1.50)

第12図 土層断面図(2)

SD 02

調査区東側の東壁②、南壁付近で検出された溝状遺構である。直線状であるが、大半は調査区外にあり、東側、南側に向かって延びていくと考えられる。検出最大長約 2.75m、地山での検出幅約 1.1m、地山面からの深さ約 0.2 ~ 0.3m を測る。埋土は暗褐色粘質土層である。出土遺物はない。SD01 ほど深く掘り込まれてはいないものの、SD04、SD05 の 4 倍ほどの幅をもつ大型の溝であるため、方形周溝墓あるいは古墳の周溝であると考えられる。

SD 03

調査区東側の壁際中央で検出された溝状遺構である。南北方向に直線状に延びる。検出長約 0.45m、地山面からの深さ約 0.15m を測る。溝の東端は調査区外にあるため、幅は不明である。埋土は暗赤褐色粘質土である。切り合い関係から、SD02、SD04 よりも前に掘削されていることが明らかである。出土遺物はない。

SD 04

調査区中央から東側にかけて検出された溝状遺構である。西側から東側にかけて直線状に延びるが、東端部分でわずかに北側に屈曲する。西端は判然としないが、検出長約 8.5m、地山面での検出幅約 0.3m、地山面からの深さ約 0.1m を測る。埋土は暗赤褐色粘質土である。溝の深さがほぼ同一であること、溝の埋土が同じであること、東端部分でわずかに北側に屈曲することから、間をピットで搅乱されてはいるものの SD05 と一連の遺構と考えられる。その場合、東壁②付近で北側に向かってほぼ垂直に折れ曲がるような溝であったことになる。出土遺物はない。

ピットの項目で詳述するが、この溝に沿うような形で、深く掘り込まれたピット（P16、P63、P71）が直線状に並んでいる様子が看取されるため、このピットを竪穴建物の柱穴とした場合、建物を区画する区画溝としての機能を果たしていた可能性がある。

SD 05

調査区東側の壁際で検出された溝状遺構である。南側から北側にかけて直線状に延び、溝の北側は調査区外に続いている。検出長約 0.45m、地山での検出幅 0.25m、地山面からの深さ約 0.2m を測る。埋土は暗赤褐色粘質土である。出土遺物はない。確実ではないが、SD04 と一連の遺構であると考えられる。その場合、L 字状に延びる溝だったことになり、建物を区画する区画溝である蓋然性が高くなる。

ピット

調査区全体から、極めて高密度で検出されている。SD01 などの溝中で見つかったピットも含め、全て地山面で検出している。ピットには検出順に番号を付しており、その一覧は第 2 表に示した。番号を付けているピットだけで 97 基が認められる。ピットには切り合いが見られ、全て同一時期に掘られたものではないため、地山面より上層から掘り込まれているピットも一部にはあると思われるが、どのピットがそうであるかは判然としない。遺物が検出されたピットではなく、またピットの埋土、形状、深さもまちまちであるため、それぞれのピットについてその性格を明らかにすることは難しい。ピットの埋土については、大きく分けて包含層上層と似た均質な褐色土と、包含層下層に似た黒褐色土あるいは暗褐色土があり、堆積した時期が異なる可能性があるが、ピットを掘りなおしている可能性もあるため、単純に埋土のみから

そのピットの形成時期を確定させることはできない。

ただし、SD04に沿う形で、地山からの掘削深が0.4mを超えるピットP16、P63、P71が東西方向に直線状に並んでおり、また、それらと平行するようにして、P23、P40、P42も調査区北側で直線状に並んでいる。更には、これらと直角になるように、東壁①近くでP42、P51、P71も直線状に並んでおり、これらのピットは掘立柱建物の柱穴であると考えられる。その場合、建物の規模は南北およそ3.2m、東西およそ2.5mになり、2間×2間の建物ということになる(SB01、第14図)。更に、調査区南側において、同様に地山からの掘削深が0.3mを超えるピットが正方形状に配列されている(P13—P10—P93、P93—P90—P89、P89—P57—P58、P58—P17(P18)—P13)。これらのピットも同様に掘立柱建物の柱穴であると考えると、P17(P18)—P90、P10—P57の直交点に深いピットがないことに若干疑問は残るもの、2間×2間の建物ということになり(SB02)、その規模は2m×2.3m程度に復元できる。SB01、SB02が建てられた時期については、明確にピットに伴う遺物がないため、特定することは難しい。ただ、SB01、SB02の両者ともSD01の肩部を切る形で西隅のピットが掘り込まれているため、少なくともSD01と同時併存していたものではないと考えられる。SD01が掘り込まれる前あるいは埋没後の所産と考えられるが、そのどちらかを確定させることは難しい。また、SB01、SB02は主軸を違え、重なるようにして配置されていること、SB02の東隅のピット(P89)が、SB01の区画溝と考えられるSD05を切って掘り込まれていることから、SB01→SB02の順に造られたと考えられる。

そのほかのピットについても、多くは掘立柱建物の柱列であると考えられるが、それら一つ一つについて建物の規模や配列を復元することは困難な状況である。

焼土

西壁面の3層は橙色を呈した焼土層となっている。SD01の肩部の位置にあたるが、ちょうど攪乱を受けている部分で検出されており、地山を掘り込んで形成されている。出土遺物はないが、完全にSD01が埋没しきらない状況で、その肩部で検出されていることから、中世以降に墳墓を意識した何らかの祭祀を行った痕跡である可能性がある。あるいは、高蔵遺跡の第4次調査において、鉄滓や鋳型らしい破片を出土した、鍛冶に関わると推測される遺構が調査されており(竹内1990、第13図)、この焼土もそれに類する遺構である可能性がある。

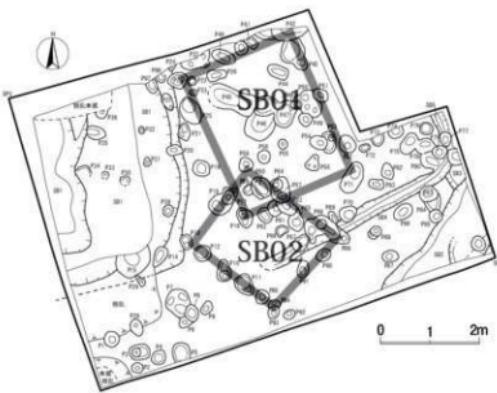


第13図 4次調査で出土した鋳型と思われる破片(竹内1990)

第2表 ピット一覧表

遺構番号	埋土	平面形	検出水準値	底水準値	深さ	備考
P1	褐色土	円	8.15	7.81	0.34	
P2	褐色土	円	8.26	8.16	0.1	
P3	褐色土	円	8.18	7.85	0.33	
P4	褐色土	円	8.24	8.17	0.07	
P5	褐色土	円	8.24	8.01	0.23	
P6	褐色土	円	8.22	7.66	0.56	P7、P8を切る
P7	褐色土	円	8.18	7.9	0.28	P6に切られ、P8を切る
P8	褐色土	円	8.23	8.01	0.22	P6、P7に切られる
P9	褐色土	円	8.23	8.13	0.1	
P10	褐色土	不整	8.19	7.86	0.33	
P11	褐色土	楕円	8.18	7.91	0.27	
P12	褐色土	円	8.14	8.02	0.12	
P13	褐色土	楕円	8.11	7.68	0.43	SD01に接する
P14	黒褐色土	円	7.96	7.82	0.14	SD01内
P15	黒褐色土（地山ブロック（黄白色土）を少し含む）	円	7.66	7.44	0.22	P29に接する、SD01内
P16	褐色土	楕円	8.18	7.69	0.49	
P17	褐色土	楕円	8.05	7.72	0.33	P18の一部
P18	褐色土	不整	8.16	7.55	0.61	内部にP17を含む
P19	褐色土	円	8.12	7.63	0.49	
P20	黒褐色土	円	8	7.48	0.52	SD01内
P21	黒褐色土	楕円	7.99	7.11	0.88	SD01に接する
P22	黒褐色土	円	7.88	7.61	0.27	
P23	黒褐色土	円	7.78	7.29	0.49	SD01に接する
P24	黒褐色土	円	7.85	7.73	0.12	SD01に接する
P25	黒褐色土	円	7.97	7.44	0.53	
P26	暗褐色土	不整	8.01	7.6	0.41	
P27	黒褐色土	円	7.61	7.44	0.17	
P28	褐色土	円	8.18	7.78	0.4	
P29	褐色土	楕円	8.08	7.9	0.18	P15に接する
P30	黒褐色土	円?	7.44	7.27	0.17	SD01内
P31	黒褐色土	円	7.4	7.28	0.12	SD01内
P32	褐色土	円	7.4	7.28	0.12	SD01内
P33	褐色土	円?	7.44	7.19	0.25	SD01内
P34	黒褐色土	円?	7.23	7.1	0.13	SD01内
P35	黒褐色土	楕円	7.26	7.16	0.1	SD01内
P36	褐色土	円?	7.2	7.08	0.12	SD01内
P37	褐色土	楕円?	7.92	7.73	0.19	
P38	暗褐色土	円	7.84	7.58	0.26	
P39	暗褐色土	円	—	—	—	SD01内
P40	褐色土	楕円	8.16	7.61	0.55	
P41	褐色土	楕円	8.16	7.98	0.18	
P42	黒褐色土	楕円	8.24	7.6	0.64	P43を切る、埋土は特に中心部が黒い
P43	褐色土	不整	8.24	8.08	0.16	P42に切られる
P44	褐色土	楕円	8.22	8.16	0.06	
P45	暗褐色土	楕円	8.21	7.99	0.22	P46を切る
P46	暗褐色土	円	8.22	8.14	0.08	P45、P47に切られる
P47	暗褐色土	円	8.22	8.03	0.19	P46を切り、P48に切られる
P48	暗褐色土	楕円	8.22	—	—	P47、P50を切る
P49	暗褐色土	円	8.24	8.01	0.23	P50を切る
P50	暗褐色土	不整	8.24	8.15	0.09	P48、P49、P51に切られる
P51	暗褐色土	円	8.24	7.82	0.42	P50を切る
P52	暗褐色土	円	8.3	8.17	0.13	
P53	暗褐色土	楕円	8.27	8.19	0.08	P54に切られる
P54	暗褐色土	円	8.27	8.01	0.26	P53を切る
P55	暗褐色土	三角	8.25	8.19	0.06	
P56	暗褐色土	円	8.24	8.04	0.2	
P57	暗褐色土	円	8.24	7.47	0.77	内部にP 64を含む
P58	暗褐色土	円	8.24	7.91	0.33	
P59	暗褐色土	円	8.2	8.01	0.19	P60に切られる
P60	暗褐色土	円	8.2	7.62	0.58	P59、P57を切る

遺構番号	埋土	平面形	検出水準値	底水準値	深さ	備考
P61	暗褐色土	円	8.19	8.11	0.08	P62 を切り、P63 を切る
P62	暗褐色土	円	8.18	8.08	0.1	P61 に切られる
P63	暗褐色土	楕円	8.24	7.68	0.56	P65 を切り、P57 に切られる
P64	暗褐色土	楕円	7.88	7.61	0.27	P 57 の一部
P65	暗褐色土	楕円	8.22	7.66	0.56	P63 に切られる
P66	暗褐色土	不整	8.21	8.13	0.08	
P67	暗褐色土	円	8.21	7.62	0.59	SD04 を切る
P68	暗褐色土	不整	8.22	7.59	0.63	SD04、P89 を切る
P69	暗褐色土	直線状	8.28	8.21	0.07	SD04 に接する
P70	暗褐色土	円	8.3	8.1	0.2	SD04 を切る
P71	暗褐色土	楕円	8.29	7.88	0.41	
P72	暗褐色土	円	8.3	8.26	0.04	
P73	暗褐色土	円?	8.31	8.26	0.05	
P74	暗褐色土	円?	8.31	8.24	0.07	
P75	暗褐色土	楕円	8.29	8.14	0.15	P78 に接する
P76	暗褐色土	円	8.25	8.22	0.03	
P77	暗褐色土	円	8.24	7.89	0.35	SD05 を切る
P78	暗褐色土	円	8.24	8.19	0.05	P75、p80 に接し、P79 に切られる
P79	暗褐色土	円	8.24	7.99	0.25	P78、P80 を切る
P80	暗褐色土	円	8.22	8.12	0.1	P78 に接し、P79 に切られる
P81	暗褐色土	円	8.26	7.89	0.37	SD04、P84 を切る
P82	暗褐色土	円	8.28	8.1	0.18	
P83	暗褐色土	楕円	8.27	7.95	0.32	
P84	暗褐色土	三角?	8.25	8.13	0.12	P81、P85 に切られる
P85	暗褐色土	円	8.26	8.01	0.25	SD02、P84 を切る
P86	暗褐色土	楕円	8.31	8.19	0.12	
P87	暗褐色土	円	8.28	8.13	0.15	
P88	暗褐色土	円	8.3	8.15	0.15	
P89	暗褐色土	楕円?	8.28	7.93	0.35	SD04 を切り、P68 に切られる
P90	暗褐色土	円	8.25	7.87	0.38	
P91	暗褐色土	円	8.25	7.95	0.3	
P92	暗褐色土	円	8.27	8.07	0.2	
P93	暗褐色土	円	8.26	7.88	0.38	P94 を切る
P94	暗褐色土	円	8.22	8.07	0.15	P93 に切られる
P95	暗褐色土	円	8.22	8.05	0.17	
P96	暗褐色土	円?	7.97	—	—	SD01 内
P97	暗褐色土	楕円?	7.86	7.6	0.26	SD01 内



第 14 図 ピットの配列から復元される据立柱建物

第4節 遺物（第15図、第3表、図版1-6・7）

出土遺物は古墳時代以降、中世までのものが出土しているが、小破片のものばかりで量も少なく、コンテナケースで1箱分弱である。

以下、まずは実測図を作成することができた遺物について記述する。なお、今回の調査区の壁面に露出していた遺物については、遺物A～Iと名称を付け、土層断面図（第11図・第12図）にもそれぞれ反映させているが、このうち実測図を作成することができたのはA～Eの遺物のみであった。F～Iの遺物については細片であったため、実測図は作成せず、写真を撮影するにとどめた（図版1-7）。その内容については後述する。

以下に挙げる遺物のうち、1・5・7（このうち5については西壁壁面から出土したものであるが）についてはSD01から出土したものであり、それ以外については包含層より出土したものである。先述したように、今回の調査区では遺物が見つかったピットではなく、また溝についても、SD02～SD05については遺物が検出されていない。

（1）須恵器

1は壺蓋で、2・3は环身である。1の壺蓋の天井部付近はヘラケズリが施されており、天井部と口縁部の間に明瞭な稜が認められる。口径は明確ではないが15.2cm程度に復元され、また口縁部は1cm足らずの短小な幅でほぼ垂直に立ち上がっていることから、I-41号窯式期（8世紀前葉）と推定する。一方、2・3の环身については、口縁部がほぼ垂直に立ち上がることから、H-11号窯式期（5世紀末葉）のものである可能性がある。

4～6は有台环である。いずれも底部に回転ヘラケズリが行われている。このうち4は、高台断面が撥形を呈し、角が強く張り出しているため、尾野編年で言うV期古段階（8世紀中葉）の特徴を持っていると言える。ただし、高台端部よりも下側に底部が突出するという特徴からは、IV期新段階（8世紀前葉）に遡る可能性もある。一方、5・6は、高台部の張り出しがやや弱くなっているため、4よりも後出のV期中段階（8世紀後葉）のものと考えられる。また、この時期の特徴として、高台部が内端接地するものがほとんどみられないこと、器高6cmを超える深手の有台环が一定量認められるようになることが挙げられ（尾野2000）、これらの特徴はそれぞれ5・6に当てはまっている。ただし、5の有台环については、同時期でもかなり大型の部類に属するものであると考えられる。

7・8は甕であり、7は肩部から頸部にかけて、8は胴部である。このうち7は外面に平行タタキを施したのち自然釉がかかっている。また、内面には、頸部と胴部の境に幅1.7cmほどの凹みが巡っており、当て具の痕跡等は磨り消されている。頸部は胴部から垂直に立ち上がりらず、頸部中位やや下方が最も細くなると思われ、失われている口縁部は大きく外反していくと推測される。このことから、7は少なくとも蝮ヶ池窯式期（6世紀後半）以降の所産であると考えられる。8の外面には平行タタキ、内面にはナデが施されている。

9は細頸瓶の肩部である。内面に施されているナデの方向が、縱向きになっているためそう判断した。頸部の立ち上がり内面には小さな段が付けられ、鉄軸が施されている。頸部がほぼ失われているため時期

比定は難しいが、細頸瓶が出現するのは H-44 号窯式期とされており、7 世紀以降の所産であると考えられる。

(2) 土師器

10 は瓶の把手部分である。指頭圧痕が明瞭に残る。

(3) 灰釉陶器

11 は深碗である。高台部には回転糸切り痕が残る。口縁部は残存していないため正確な時期の比定は難しいが、H-72 号窯式期（10 世紀後半～11 世紀初頭）のものと推測される。

(4) 山茶碗

12 は碗である。高台部や体部下半が残存していないため確実には言えないが、口縁端部が角ばっており、口縁直下が若干窪んでいることから、第 6 型式（第Ⅷ期第 1 型式、13 世紀前葉）に該当するのではないかと推測される。

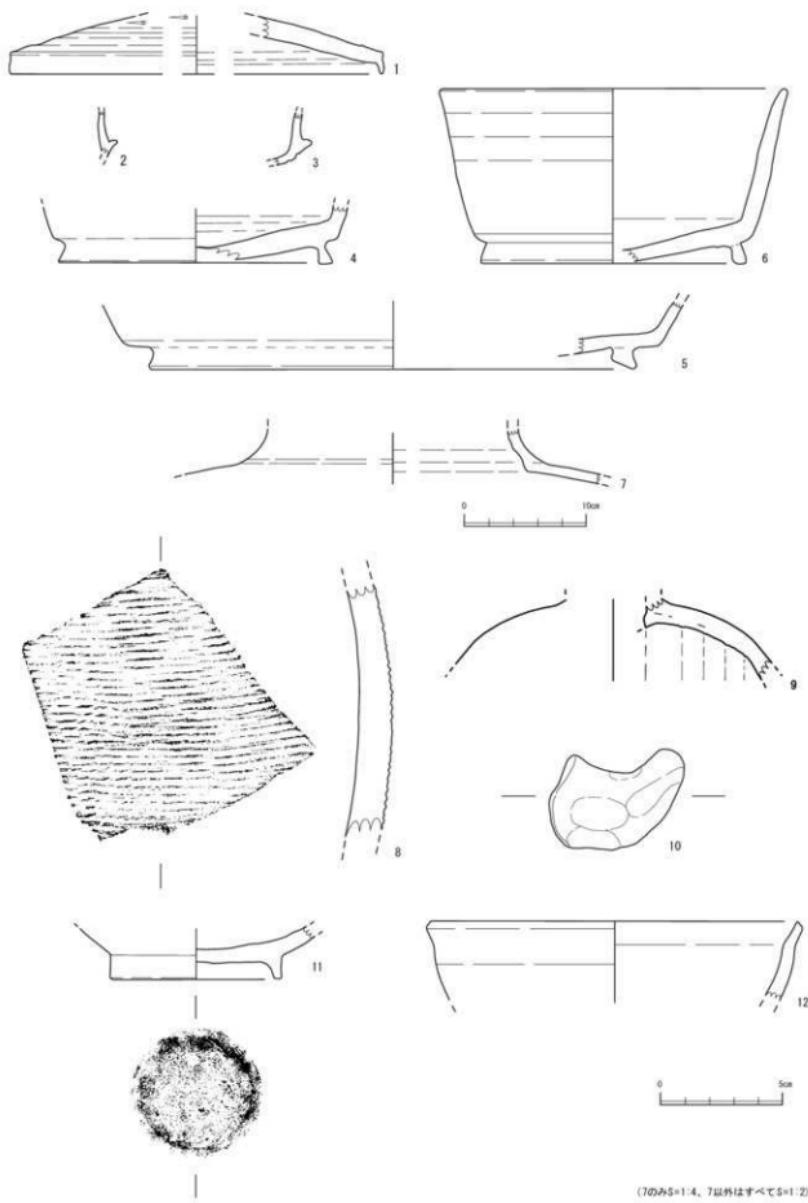
(5) その他の遺物（図版 1-7）

先述した通り、今回は壁面に露出していた遺物のうち、遺物 F～I については実測図を作成していない。このうち、F と I については両者とも須恵器の环身の底部と考えられ、ヘラケズリ痕が外面に明瞭に残されている。この 2 点は接合しないが、両者とも、東壁②の 3 層（暗赤褐色粘質土層）で近接して見つかっており、さらに土器胎土・焼成・色調ともに類似しているため、同一個体である可能性が高い。一方、G と H については土師器であるが、細片でありなおかつ表面が摩耗しているため、器種や部位を明らかにすることはできなかった。

その他、図示はしていないが、磁器、山茶碗、石製硯などが表採されている。

第 3 表 遺物観察表

No.	種類	器形	部位	出土地点・層位	法量 (cm)	残存率	色調	備考
1	須恵器	环蓋		西半区 SD01 畦北壁 1 層	口径：(15.2) 残存高：2.4	—	内外：2.5Y6/1 黄灰	
2	須恵器	环身	胴部	東半区 包含層（東 壁①・② 3 層）	残存高：2.0	—	内外：2.5Y7/1 灰白	
3	須恵器	环身	胴部	東半区 包含層（東 壁①・② 3 層）	残存高：2.2	—	内外：5Y7/1 灰白	
4	須恵器	有台环	底部	西半区 北壁① 4 层	底径：(11.3) 残存高：2.3	1/4 (高台)	内外：2.5Y7/1 灰白	土層断面図中の遺物 D 回転ヘラケズリ
5	須恵器	有台环	底部	西半区 SD01 西壁 5 層	底径：(19.8) 残存高：2.7	—	外面：5Y5/1 灰 内面：7.5Y6/1 灰	土層断面図中の遺物 C 回転ヘラケズリ
6	須恵器	有台环	口縁部 ～底部	西半区 北壁① 4 层	底径：(10.9) 残存高：7.7	—	内外：5Y6/1 灰 断面：2.5Y5/1 ～ 2.5Y7/1 黄灰～灰黄	土層断面図中の遺物 E 回転ヘラケズリ
7	須恵器	甕	肩部 ～頸部	西半区 SD01 畦北壁 1 層	残存高：4.6 頸部径：(11)	—	外面：7.5Y2/2 オリーブ黒 内面：5Y7/1 灰白	平行タタキのち自然袖 がかかる
8	須恵器	甕	胴部	東半区 包含層（東 壁①・② 2 層）	残存高：10.3	—	内外：2.5Y8/1 灰白	外面平行タタキ、内面 ナデ
9	須恵器	細頸瓶	肩部 ～頸部	東半区 包含層（東 壁①・② 2 層）	残存高：3.4 頸部径：(4.7)	—	外面：2.5Y7/1 灰白 内面：10YR6/3 にぶい黄橙	内面ナデ 頸部の立ち上がり内面 に鉄釉かかる
10	土師器	甕	把手	東半区 包含層（東 壁①・② 2 層）		—	10YR8/2 灰白	
11	灰釉陶器	深碗	底部	西半区 北壁① 2 层	残存高：2.1 底径：7	7/8 (高台)	外面：10YR7/1 灰白 内面：2.5Y7/2 灰黄	土層断面図中の遺物 A 回転糸切り
12	山茶碗	碗	底部	西半区 北壁① 4 层	残存高：2.3 底径：(11.3)	—	内外：2.5Y7/1 灰白	土層断面図中の遺物 B 回転ヘラケズリ



第15図 出土遺物

(7のみ $5\times 1:4$ 、7以外はすべて $5\times 1:2$)

第5節 まとめ

今回の調査地点では、部分的に攪乱を受けている箇所があるが、包含層および溝やピットなどの遺構が良好な状態で残されていた。包含層にはぶい赤褐色粘質土層（古代～中世）・暗赤褐色粘質土層（古墳時代以前）の2層からなり、それぞれ0.1m～0.2mほどの厚みがあったが、この堆積状況は高蔵遺跡内の他の調査地点での基本的な順序と大きく変わることろがない（宮腰2003）。しかし、包含層・遺構が良好に残存しているにも関わらず遺物の量は少なく、造られた年代を明らかにできた遺構は全くなかった。

今回の調査区で検出できた遺構のうち溝については、疑問点は残るものそのうち2条（SD01、SD02）については方形周溝墓あるいは古墳の周溝であった可能性がある。弥生時代中期後半から古墳時代後期前半にかけて、高蔵遺跡の墓域は南西部にかけて広がっており、今回の調査区の一つ西側の街区に設けられた第17次・19次・25次・40次の調査区でも墳墓が発見されているため、この2条が墳墓に伴うものだとしても分布上違和感はない。

また、今回SD01の上層より、焼土が検出されており、これについて祭祀の痕跡あるいは鍛冶の痕跡の可能性が考えられることは既に述べた。高蔵公園の西側で行われた第31次調査などでは、古墳の周濠上位から山茶碗などが出土しているが、そのことから古墳の周濠が中世にも埋まり切っておらず、そこに何かしらの造作が加えられた可能性が推測されている（註1）。今回の調査区内のSD01も、出土遺物や土層堆積状況を見ても、明確に中世段階にも溝であったと断定することはできないが、可能性としては高いと思われる。中世の人々が「墳墓」としての意識をもってこの溝を掘っていたのかそうでないかは知る術もないが、景観としては単なる平地ではなかった可能性も考慮しておくべきだろう。

また、今回の調査区で大量に検出されているピットについては、その多くが掘立柱建物の柱穴と考えられるが、帰属年代、建物の数やその変遷などは不明である。ただし、今回はピットの深さおよび配置から、少なくとも2つの掘立柱建物が存在していたことが確認でき、しかも、そのうちの一つには区画溝（SD04、SD05）が巡っていた蓋然性が高いことを指摘できた。高蔵遺跡内で住居址というと、これまでの調査では竪穴住居を中心に語られることが多く、特に遺跡南側の第34次・第39次調査地点では弥生時代と古代の竪穴住居が多く検出されたことで、弥生時代および古代の居住域の中心となっていたとされている。一方、ピット（掘立柱建物の柱穴を含む）については、その性格を明確にすることが難しいということもあってか、ピットの数量や、遺物が出土したピット・重要な遺構と関わりをもつピットなどの記述などで済まされることが多く、その性格について積極的に位置づけられることが少なかった（註2）。先述したように、高蔵遺跡では特に古墳時代以降の居住域の状況にまだ不明な点が多く残っているため、今後の調査の際は、竪穴住居のみならず、掘立柱建物についても可能ならば復元を行い、その二者の復元をもって居住域の復元に資するべきだろう。

以上のように、今回の調査区では、明確にその性格が分かる遺構はわずかであり、その記述も推論に頼る部分が大きかったようと思う。ただ、出土遺物から、人々が長期間にわたって土地利用をしていた事実をうかがうことができた。弥生時代から古墳時代にかけての墓域の広がり、古墳時代以降の居住域の様相などについては、今後の調査をもって補完していくたい。

- (註1) しかも、第31次調査では、中世の大溝が方形周溝墓や古墳の軸と並行して走っており（伊藤・嶺
嶺2002）、これも古墳の周濠が長期間溝状に窪んでいたことの傍証になる。
- (註2) ただし、今回の調査地点にほど近い第19次調査地点での成果をまとめた報告書（山田・野口
1999）においては、ピットの配置及び埋土から柱穴の列の復元を行っており、注目される。

参考文献

- 伊藤厚史・嶺嶺茂ほか 2002『埋蔵文化財調査報告書42 高藏遺跡（第31次・32次・33次・立会）、
鳴海城跡（立会）』名古屋市文化財調査報告書55 名古屋市教育委員会
- 伊藤厚史・西本昌司ほか 2020『埋蔵文化財調査報告書86 高藏遺跡（第60次）』名古屋市教育委員会
- 尾野善裕 2000『猿投窯（系）須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅』猿投窯・湖西窯編年
の再構築 第1分冊、東海土器研究会
- 城ヶ谷和広 2015「第5節 編年論 須恵器」『愛知県史』別編 古代 猿投系 窯業1、愛知県史編さん
委員会
- 竹内宇哲 1990『高藏遺跡—第4次調査の概要—』名古屋市教育委員会
- 野澤則幸 1998『高藏遺跡第17次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 藤井康隆 2008「古墳—70 高藏遺跡」『新修名古屋市史』資料編 考古1、名古屋市
- 藤井康隆・伊藤正人ほか 2003『埋蔵文化財調査報告書47 高藏遺跡（第35次～第38次・第40次・
第41次）』名古屋市文化財調査報告61 名古屋市教育委員会
- 水野裕之・木村有作ほか 1997『埋蔵文化財調査報告書26 高藏遺跡（第12次～第15次）』名古屋市教
育委員会
- 宮腰健司 2003『高藏遺跡』『愛知県史』資料編2 弥生、愛知県史編さん委員会
- 村木誠・山田鉱一ほか 2003『埋蔵文化財調査報告書45 高藏遺跡（第1次）』名古屋市文化財調査報告
59 名古屋市教育委員会
- 村木誠 2008『弥生—28 高藏遺跡』『新修名古屋市史』資料編 考古1、名古屋市
- 村木誠・伊藤厚史ほか 2000『埋蔵文化財調査報告書45 高藏遺跡（第24次・第25次）、瑞穂遺跡（第
5次）、春日野町遺跡（第2次）、正木町遺跡（第11次）』名古屋市教育委員会
- 村木誠・藤井康隆ほか 2003『埋蔵文化財調査報告書46 高藏遺跡（第34次・第39次）』名古屋市教
育委員会
- 山田鉱一・野口泰子 1999『高藏遺跡第19次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

図版1 完掘写真

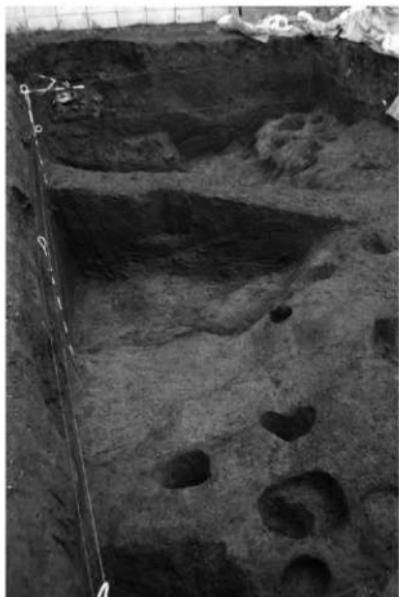


1 西半区全景



2 東半区全景

図版2 SD01



1 SD01（南西から） 挖削中



2 SD01（南西から） 完掘状況

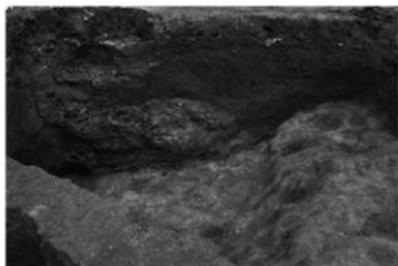


3 SD01 畦北側断面



4 SD01 畦北側断面に露出した須恵器

図版3 西半区の壁面



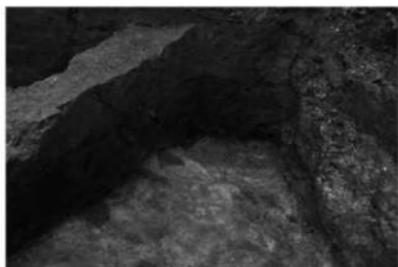
1 西半区北壁



2 北壁に露出した灰釉陶器



3 西半区西壁南側



4 西半区西壁北側



5 焼土



6 焼土（拡大）



7 西半区西壁全体



8 西半区南壁

図版4 東半区の遺構



1 東半区全景（北側から）

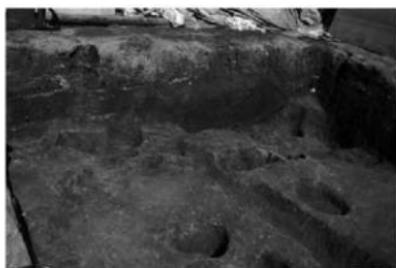


2 SD02 断ち割り状況



3 SD02 完掘状況

図版5 東半区の遺構と壁面



1 SD03 と SD05



2 SD04



3 SD04 と SB1



4 北壁①



5 東壁①



6 北壁②



7 東壁②

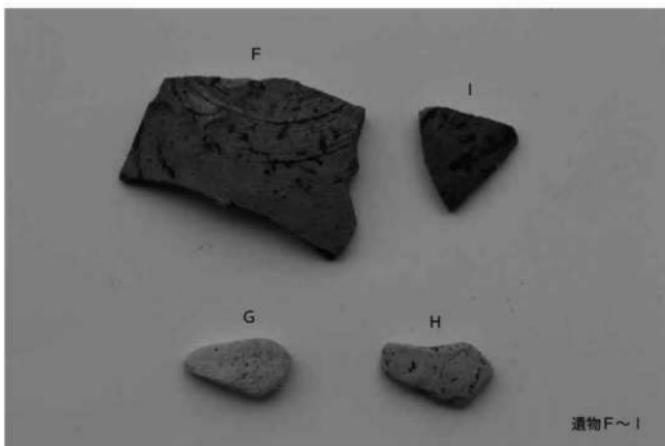


8 南壁

図版6 出土遺物（1）



図版7 出土遺物（2）



高蔵遺跡（第 62 次）



目 次

第1章 経過	31
第2章 調査の方法と成果	
(1) 調査の方法	31
(2) 層序	32
(3) 調査の成果	
1) 遺構・遺物の概要	32
2) 遺構と遺物	38
3) SK02について	42
4) 大正元年銘の鉄製上水管の「縦輪 (つぎわ)」について	44
第3章 まとめ	46



第1図 高蔵遺跡と調査位置



写真1 調査前状況（西から）

第1章 経過

当該土地を含む場所は、過去に名古屋市教育委員会文化財保護室による試掘調査を行っており、その際に溝状遺構や遺物包含層等が検出された。今回、当地点での個人住宅建築計画により、令和2年9月に事業者から埋蔵文化財包蔵地内の工事の届出がなされた。これを受けて教育委員会文化財保護室と遺跡保護の調整を行った結果、令和3年になってから市教育委員会による国庫補助金を受けての発掘調査をおこなうこととなった。

発掘調査は、令和3年1月25日からの開始であるが、調査地の敷地内に排土を積み置きするスペースの関係から、調査部分を3分割しておこなった。調査は、2月27日をもって終了した。

第2章 調査の方法と成果

(1) 調査の方法

発掘調査は、排土のスペースの関係から、調査部分を3分割して、東側からA、B、C区として東から1か所ずつ終わらせていく方法をとった。各々20m前後の調査区を4～5日ずつの日数をかけて調査した。

表土および搅乱部分の除去を小型のバックホウで行ったが、搅乱部分には、大型の重機による比較的新しいものもあり、遺構の失われた部分については残念な状態であった。

調査区の平面図は、写真測量図化を業務委託したが、3分割の調査となしたことや日程の関係などから、A区においては、平面図化を平板測量によりおこなった。

また、C区において通常は近現代搅乱の扱いとする上水管、下水管の埋設溝が検出された。このうち、鉄製の上水管の一部に大正元年銘等の文字や記号があったことから、本市の初期の水道事業に関する遺構（遺物）であり、本市上下水道局の関係者に連絡をとりその一部を回収した。そのほかはそのまま埋め戻した。



写真2 調査状況（東から）



写真3 調査状況（SK02）

(2) 層序

当地点の層序は、現地表の標高が約 8.9 m、地盤層（熱田層）上面の標高が 8.2 m あたりであるので、その間に約 70cm の堆積土層がみられる。基本的な層序は、上から、表土層（近代以降）、茶褐色土層（中世までの遺物を含む）、暗褐色土層（中世以前）が地盤層の上に堆積する。遺構埋土については、古墳時代以前の埋土は、暗褐色土か黒味の強い褐色土がほとんどである。また、今回の調査地点では、ほとんど検出されなかつたが、江戸時代から明治時代頃までの遺構埋土では、灰褐色から灰色を呈する砂質土が多い。

(3) 調査の成果

1) 遺構・遺物の概要

調査区西端部の熱田層上面（地山=黄橙色の地盤層）で検出された土坑（SK02）は、埋土が黒味の強い均質な黒褐色土で、縄文土器の小破片が 1 点のみ出土したが、他の時期の遺構埋土とも異なり、縄文時代の遺構と考えられる。

また、発掘調査区の東半部で大小の溝状遺構の一部（SD01 と SD02）が熱田層上面で検出された。ともに遺物はごく少なく、遺構の時期が確定しにくい。これまで周辺（半径 100 m ほどの範囲）で行われた発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の方墳の周濠などと考えられる溝状遺構の一部が 20 基分ほど検出されているが、今回検出の溝状遺構もこれらに該当するとおもわれる。

SD01 は、検出面で幅が 2 m ほどと推定され、検出範囲では直線状である。遺構の北半部分は、遺構の西側肩のラインが明瞭でなく、埋土の大部分が近現代の搅乱土坑により無くなっていたことや、隣接する高蔵遺跡 61 次調査区 SD01 の西側部分が重複した影響も考えられる。出土遺物はごくわずかで、弥生土器片かと思われる小片がある。

SD02 は、検出面での幅は約 1m である。曲折する部分があることから、隅の丸い方形になるかもしれない。SK02 の北に接する遺構が SD02 と同一遺構であれば、一辺が 9m ほどになるとおもわれる。出土遺物もわずかに数点出土したのみで遺構の時期を確定することが困難である。

溝状遺構のほかには、比較的浅い掘り込みのピット（小穴）が 50 基近く検出されたが、遺物が出土したのは、山茶碗片など数点が出土した P18 と須恵器片が 1 点出土した P22 だけであった。そのほかのピットは、埋土の特徴から古墳時代～中世に作られたものとおもわれる。



写真4 土層断面 (A区南壁)



写真5 土層断面 (B区南壁)



写真6 A区（東半区）全景（北から）



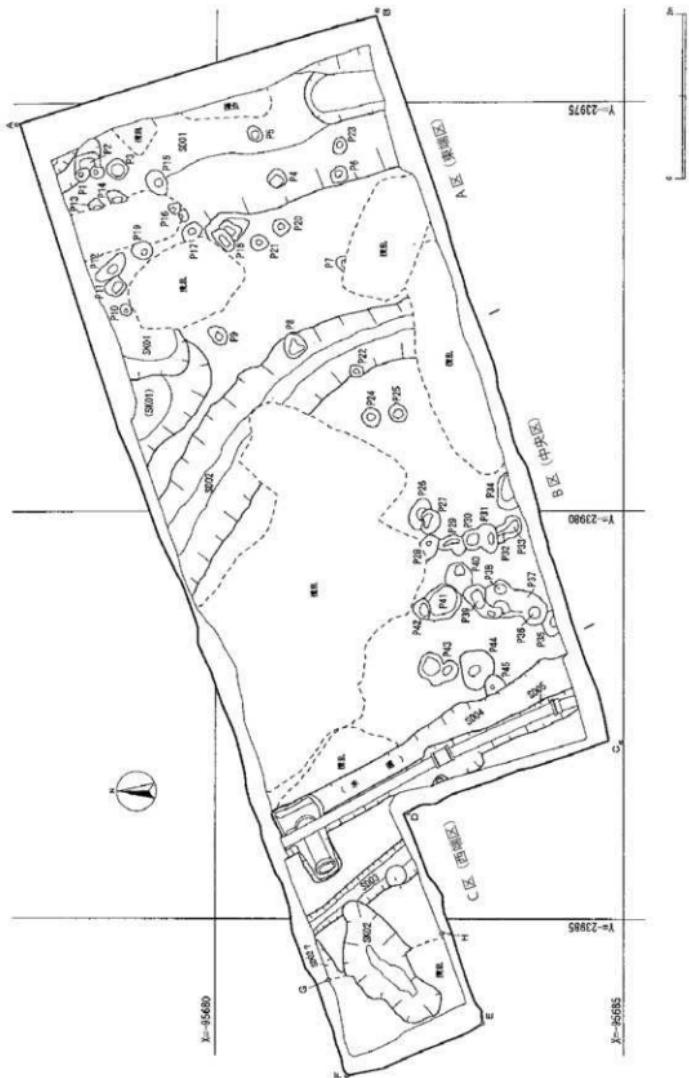
写真7 A区（東半区）全景（南から）



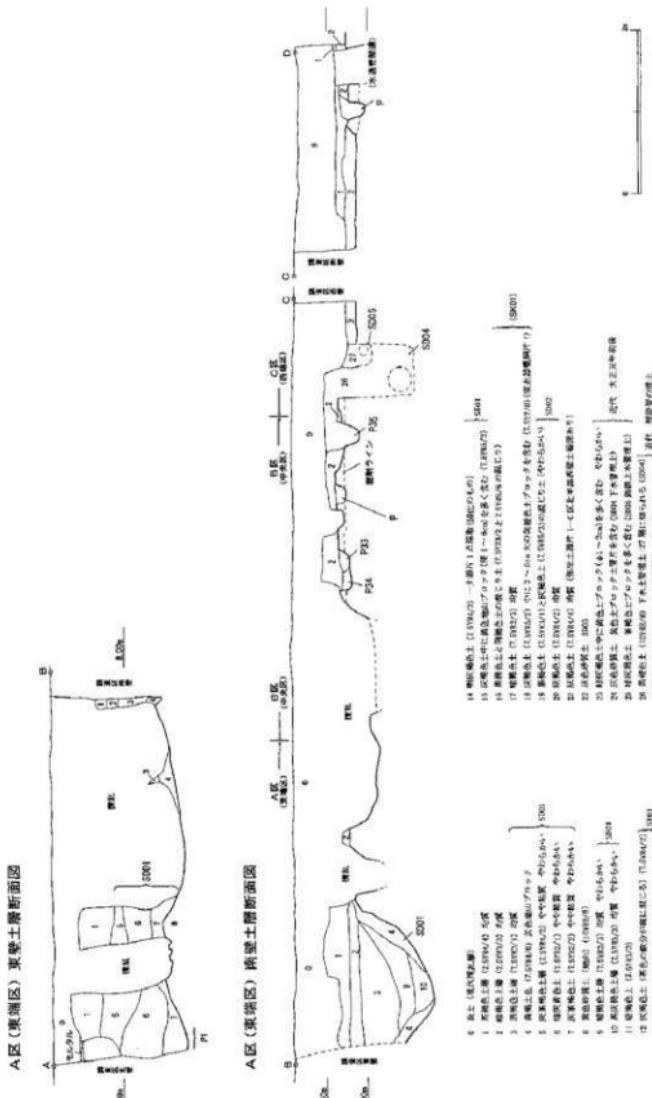
写真8 B区（中央区）全景（南から）



写真9 C区（西端区）全景（東から）

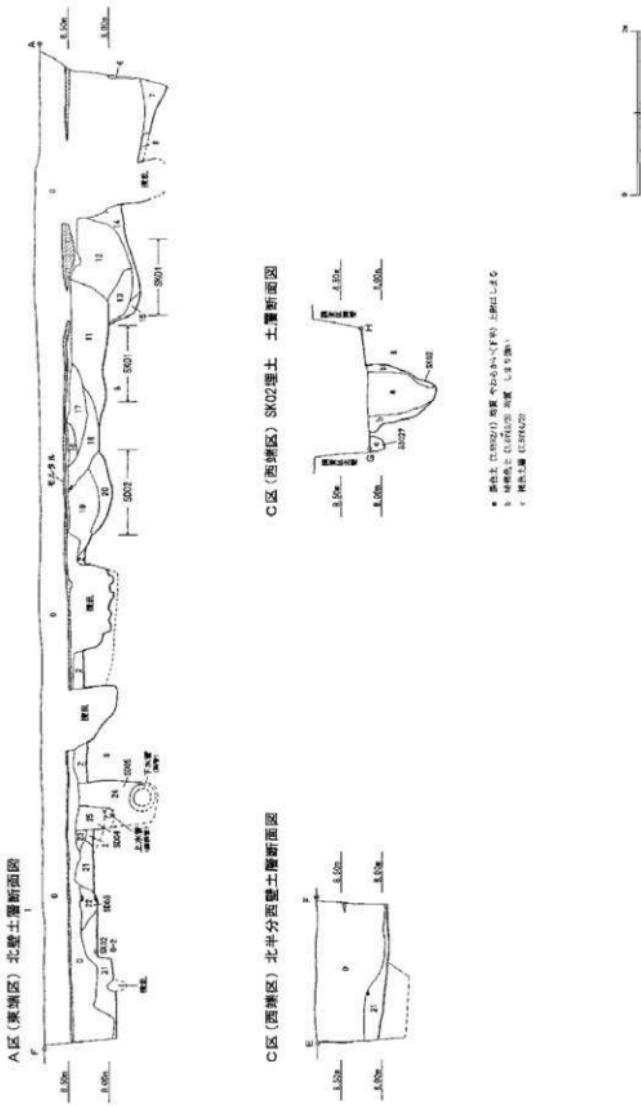


第2図 調査区遺構位置図 (S=1/60)



第3図 調査区主層断面図 (S=1/60)

第4图 调查区土壤剖面图・SK02 土层剖面图 (S=1/60)



2) 遺構と遺物

●縄文時代

SK02

- 〈形状〉 不整楕円形か
- 〈長さ〉 約 1.8 m
- 〈幅〉 約 90cm
- 〈深さ〉 約 75cm
- 〈埋土〉 黒色土
- 〈遺物の種類と時期〉 縄文土器片(早期末または中期末)
- 〈遺構の性格〉 不明

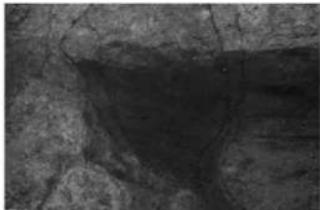


写真 10 SK02 埋土断面 (西から)



写真 11 SK02 検出状況



写真 12 SK02

●弥生時代～古墳時代

SD01

- 〈形状〉 断面は開いた V 字形で検出部分は直線状の溝
- 〈長さ〉 検出長で約 2.4 m
- 〈幅〉 推定約 2.6 m
- 〈深さ〉 約 90cm
- 〈埋土〉 黒褐色土、暗褐色土など
- 〈遺物の種類と時期〉 弥生土器片？ 須恵器壺片
- 〈遺構の性格〉 古墳の周濠か



写真 13 SD01 調査状況



写真 14 SD01 出土遺物



写真 15 SD01

SD02

〈形状〉断面は浅く開いたU字形で、平面形は隅丸方形か
〈長さ〉検出長で約4m
〈幅〉約70~100cm
〈深さ〉約35cm
〈埋土〉黒褐色土、灰褐色土
〈遺物の種類と時期〉山茶碗片、土師器皿片、弥生土器片?
〈遺構の性格〉古墳の周濠?

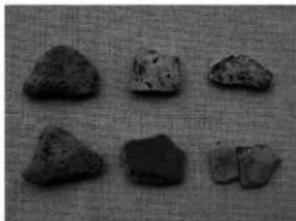


写真17 SD02出土遺物

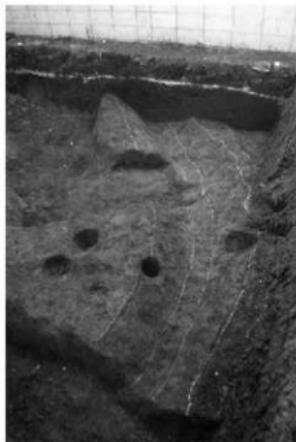


写真16 SD02

P22

〈形状〉不整円形
〈長径〉17cm
〈短径〉15cm
〈深さ〉14cm
〈埋土〉暗褐色土
〈遺物の種類と時期〉須恵器片(提瓶)
6世紀か
〈遺構の性格〉柱穴?

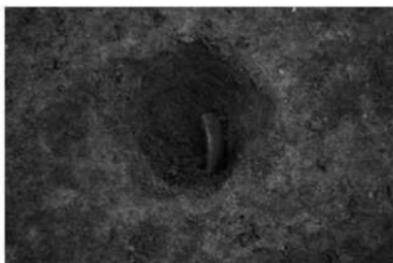
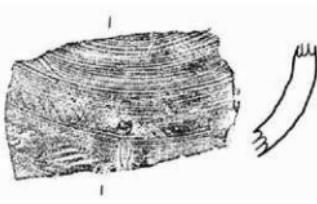


写真18 P22と出土須恵器



第5図 P22出土須恵器(提瓶) (S=1/2)



写真19 P22出土須恵器

●中世の遺物

山茶碗の小破片など中世の遺物が少量であるがP18やSD02から出土している。当遺跡では、該期の遺物、遺構が広く分布し、先行する時期の遺構埋土に影響を及ぼしている例も多い。

SK01

〈形状〉 不整円形?
〈長さ〉 部分のため不明
〈幅〉 " "
〈深さ〉 50cm以上か
〈埋土〉 灰褐色土、黒褐色土など
〈遺物の種類と時期〉 鉢片、土鍋片など中世陶器類
(13~14世紀頃)
〈遺構の性格〉 不明



写真 20 SK01



写真 21 (SK01) 土層断面(右側)



写真 22 SK01 出土遺物

●近代以降

SD03

〈形状〉 断面は浅く開いたU字形で、直線状の溝。
〈長さ〉 検出長約 1.5m
〈幅〉 約 55cm
〈深さ〉 約 25cm
〈埋土〉 灰色砂質土
〈遺物の種類と時期〉 型紙刷染付磁器碗、染付磁器
浅鉢片など。明治時代後半頃
〈遺構の性格〉 側溝か



写真 23 SD03 (土管右側)



写真 24 SD03 出土遺物



写真 25 SD03 埋土断面(調査区北壁)

SD04

〈形状〉直線状の溝。
〈長さ〉検出長約 4 m
〈幅〉 約 40cm
〈深さ〉約 90 ~ 100cm
〈埋土〉黄橙色土（ブロック状）
〈遺物の種類と時期〉瀬戸美濃産陶器お通り徳利片、いぶし瓦片。明治時代後期
〈遺構の性格〉下水陶管（土管）の埋設溝



写真 26 SD04 の下水土管 (陶管)



写真 27 SD04 出土遺物



写真 28 SD04 (左)、SD05 (右) の埋土断面

SD05

〈形状〉直線状の溝。
〈長さ〉検出長約 4 m
〈幅〉 約 25cm
〈深さ〉約 35cm
〈埋土〉灰褐色土
〈遺物の種類と時期〉染付磁器蓋片。明治時代後期
〈遺構の性格〉上水管（鉄管）の埋設溝。大正元年銘の鉄製「縫輪(つぎわ)」を使用。



写真 29 SD05 (下水管と縫輪)



写真 30 SD05 出土遺物



写真 31 縫輪の鋳出文字等

3) SK02について

調査区西端部の地山面で検出されたSK02は、平面形が幅約0.9m、長さ約1.8mの楕円形（紡錘形）で、深さ約0.8mを測る遺構である。遺構の横断面形は底の尖るU字形である。埋土は均質な黒褐色土であるが、黄橙色の地山（熟田層）と埋土が特に長辺の片側（南側）でグラデーション（黄褐色～暗褐色）をなし、遺構の壁（地山との境）が明確でないという特徴があった。反対側の壁面は、地山との境は明瞭である。なお、黒褐色の埋土下位から縄文土器小片が1点出土した。

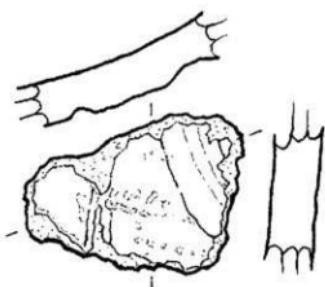
これまで、このSK02と同様な形状をなし黒味の強い色調の埋土で、遺構の時期の推定できる遺物（チャートの剥片などの出土した2基がある）が出土しないという遺構（土坑）が、熟田台地上の見晴台遺跡や高蔵遺跡から検出されていた（第7図、第1表）。

このふたつの遺跡は、弥生時代以降、中世に至る遺物包含層が堆積し、該期の遺構も多く残る遺跡として知られているが（見晴台遺跡では、縄文時代晚期の土器や縄文時代に属すると推定される石器が出土している）。この種の土坑には弥生時代以降の土器、陶器片が含まれず、切り合い関係では、関係する遺構のなかで最も古い状況でみつかっているものであった。これらの遺構が、3基並んで検出される例もあるなど、落とし穴、炉穴、墓壙、風倒木痕などの遺構や痕跡のどれかに該当するのか結論が出ないまま今回の調査に至っている。

かつてこの遺構の時期の手がかりを得るために、見晴台遺跡の発掘調査で検出された3基の土坑の埋土下部の土を放射性炭素の年代測定をおこなったところ、BC2900年、BC2985年、BC1435年（いずれも較正曆年代）の測定結果であった。ただし、各土坑の埋土がそれぞれどのような由来の堆積土壤かで遺構の形成時期にあてはまるかが変わってくるであろう。

今回の調査で、埋土中唯一の遺物であった1片の小さな縄文土器片は、胎土、器表面が非常に脆く、施文の残存状況も悪い状態であったことから、中期末頃あるいは早期末頃に相当するかの判断も分かれる状況である。この遺物だけで遺構の時期や性格を決めることができないものの、わずかであるが一步前進であると言えようか。（註1）

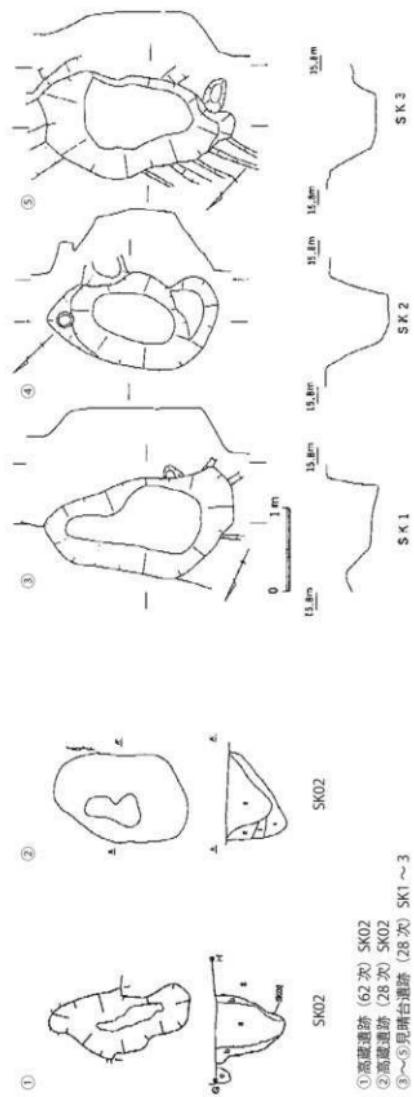
註1 文化財保護室 繩緋茂学芸員と同伊藤正人元学芸員より教示を得た。



第6図 SK02出土の縄文土器 ($S = 1/1$)



写真32 SK02出土の縄文土器



第7図 高麗道跡 (62次) SK02の主な開闢遺構 (S=1/60)

第1表 高麗道跡 (62次) SK02の主要な開闢遺構

遺跡名	所在地(区)	調査名	調査年	遺構名	遺構の平面形	遺構の横断面形	遺構の法蓋(長さ・幅・深さ:m)	埋土	出土遺物	備考
1 見晴台遺跡	南区	第28次調査	1989	SK1	不整橢円形	逆台形	2.5×1.2×0.64	淡黒褐色土	削器、剣片	東南隅埋土上部に焼土
2 "	"	"	"	SK2	"	不整橢円形	1.75×1.1×0.75	黒褐色土	削器、石核	
3 "	"	"	"	SK3	"	不整橢円形	2.2×1.2×0.56	黒褐色土		
4 "	"	第29次調査	1990	M 29・SK03	不整半月形	不明	1.9×1.2×0.5	黒褐色土	不明	不明
5 "	"	"	"	M 29・P 53	不整橢円形	"	—×0.8×0.5	"	"	"
6 "	"	"	"	M 29・P 57	"	"	—×1.1×0.5	"	"	"
7 "	"	第40次調査	2000	M40-2・SK02	不整半月形	U字形	2.1×1.1×0.5	濃い黒褐色土	無し	埋土の歴史 BC2900
8 "	"	"	"	M40-3・SK01-A	"	"	2.9×1.2×0.45	"	"	
9 "	"	"	"	M40-3・SK03	不整半月形	三角形	—×1.0×0.45	不明	不明	
10 "	"	第41次調査	2001	M41-2・SK09	橢円形	逆台形	2.0以上×1.0×0.4	"	"	埋土の歴史 BC1435
11 "	"	"	"	M41-2・SK11	"	不明	1.3以上×1.2×—	"	"	埋土の歴史 BC2985
12 高麗道跡	熱田区	第28次調査	2000	SK02	不整橢円形	不整三角形	1.4×1.0×0.70	暗褐色土など	ナイフ形石器、	
13 "	(今回)	第62次調査	2021	SK02	"	"	1.8×0.85×0.90	黒褐色土など	削器	文土器片 中期末? (早期末?)

4) 大正元年銘の鋳鉄製上水管の「継輪(つぎわ)」について(註1)

調査区南側で、敷地の南北方向に沿って、鋳鉄製の上水管が埋設状態で検出された。管部分(長さ約1.5mの部分と検出長2.2mでさらに調査区外へ続く部分)と、この管と管をつなぐ部分がある。このうち、検出部分の中央部にあるジョイント部分(「継輪」という)の上面に鋳型に彫られた文字で◎の記号(明治40年に決議された名古屋市の市章)と「大正元年」の文字、そして数字と商号(?)が鋳出されていた。また、この上水管埋設の溝の構造は、ほぼその真下に下水管(陶管)も埋設されていて、先行して敷設された下水管埋設の溝の埋土を切って敷設されている。

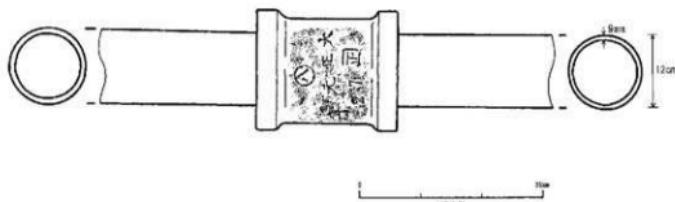
名古屋市の上水道事業の歴史をたどると、上水管の敷設が始まった「創設工事」は、明治43年に着工されているが、現在の熱田区の地域である旧熱田町は、明治40年に名古屋市に編入され、この地域が海岸に臨んでいるところなど低湿な場所が多く、純良な井戸は稀であった。また、同年、熱田港が名古屋港と改称し、この地域の公有水面埋立地(築地)も順次名古屋市に合併されたが、船舶給水のための施設もほとんどなかった。このような状況から、本市の上水道事業は、旧熱田町敷設の拡張工事(第1期「拡張工事」として、大正2年に着工(大正元年12月に国庫補助金が確定)することができた。拡張工事は、創設工事と並行して施工し、大正3年3月に創設工事とともにその主要部分が竣工した(註2)(第9、10図参照)。これらの状況から、今回出土した「継輪」にある大正元年銘は、工事の補助金が確定し、上水管(継輪)の発注または、製造された年を示しているものとおもわれる。

今回検出された鋳鉄製上水管は、大正期の地図をみると、当時、調査地点付近にあった寺院境内の西辺に沿った位置にあたるようであり、道路の表記はないものの寺院敷地際の南北の小径に埋設されたものと考えられる。

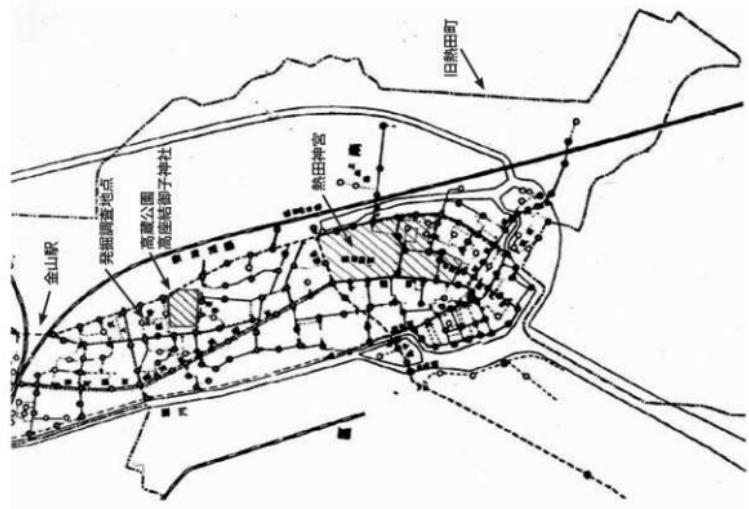
以上のように当資料は、本市の水道事業創成期の証として検出されたものであり歴史的価値は高く、「継輪」と管の一部を切断して回収し、名古屋市政の近代化遺構(遺物)として保管している。

註1 名古屋市上下水道局の「水の歴史資料館」日比野俊典館長、大坪成生副館長には、発掘調査現場にて上水管の検出状況を見せていただき、多くのご教示を得た。当資料が展示等に活用されれば幸いである。また、文化財保護室伊藤厚史学芸員からは、多くの助言を得た。

註2 2014『名古屋市水道100年史』名古屋市上下水道局より抜粋、引用した。



第8図 SD05の鋳鉄製上水管と継輪



第10図 上水道の第1期拡張工事配水管配管図（部分）（注2による）

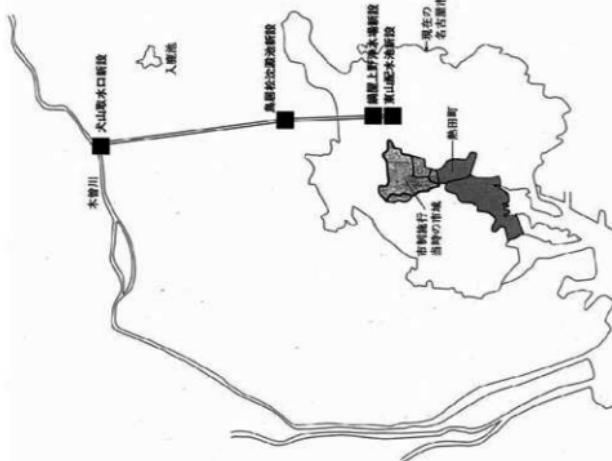


図 施設整備計画区域（昭和33年～昭和34年）
（供給免足地、計画未定に合併した名古屋市域）
■ 第1期拡張事業対象地域（大正3年～着工）

第9図 名古屋市上下水道創設及び第1期拡張事業における整備概要（注2による）



写真33 SD05（上水管の埋設溝）



写真34 鋳鉄製上水管の切断作業



写真35 取り上げた上水管と継輪

第3章 まとめ

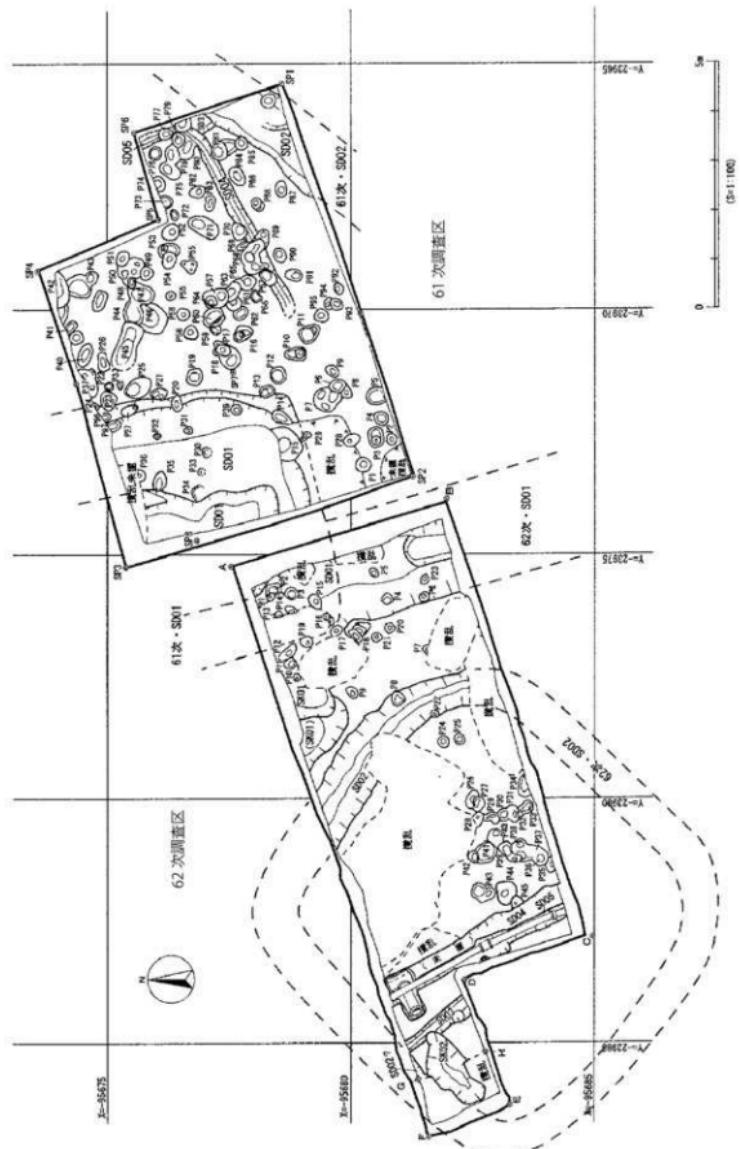
今回、50mあまりの調査であったが、溝状遺構（SD01、SD02）が検出された。これらの遺構は、当遺跡のこれまでの調査から、弥生時代の環濠、方形周溝墓の溝、古墳時代の円墳や方墳の周溝のいずれかの一部である可能性が高いが、部分的な検出であることや、それぞれの出土遺物は、小破片が少量であり、出土遺物から遺構の性格や時期を決めることが困難である。

SD01については、遺構の断面形をみると弥生時代の環濠の断面にも、また大型の方墳の周濠にもみえる。やはり、遺物からの判断は難しい。なお、SD01の北側延長部分は、高蔵遺跡第61次調査区の北西部で検出された大型の遺構（高蔵遺跡61次SD01）と重複し切られているとおもわれ、肩のラインが崩れている状態である。

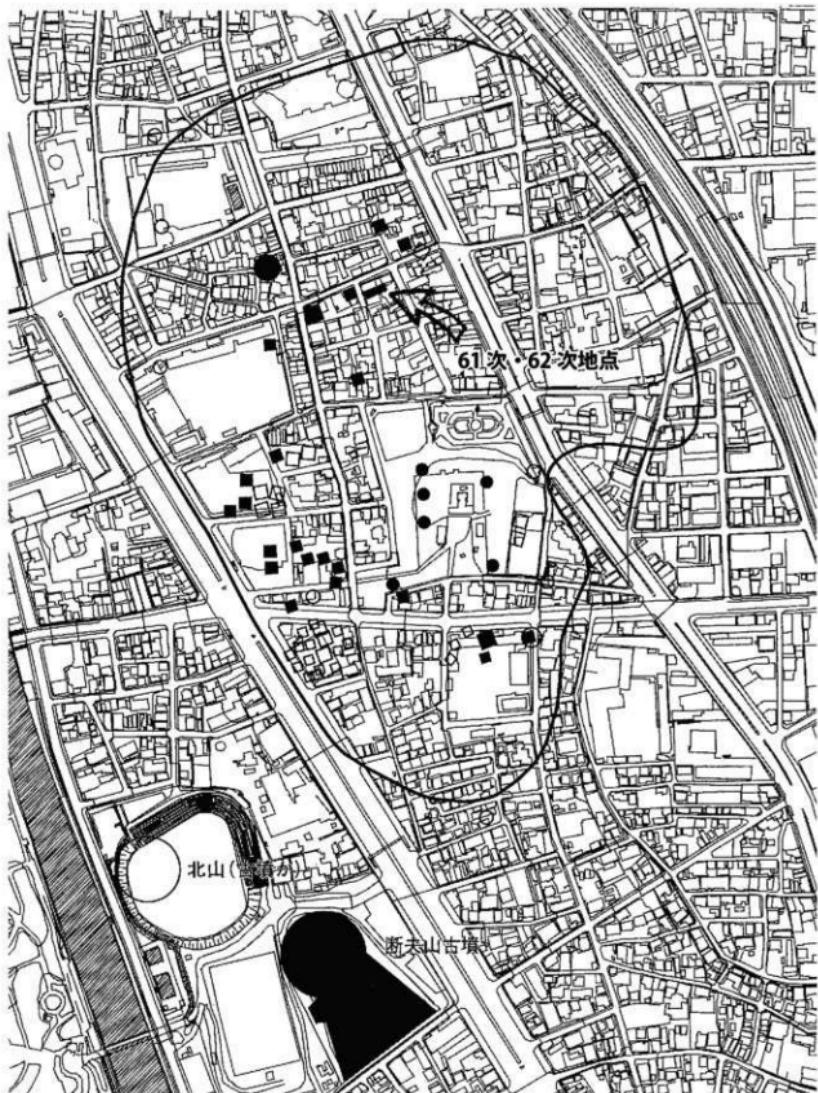
SD02については方形を呈する一辺が6～7mの方形墳か周溝墓の溝の一部かとおもわれる。高蔵公園北側で当遺跡範囲の中央部付近には、小規模な方墳や方形周溝墓が集中するエリアがあり、これに加わる遺構として捉えられるであろう。

また、調査区西端部分で検出されたSK02も注目される遺構であり、縄文時代の「土坑」状の遺構である。今回、時期の手がかりとなる土器片1片が出土したが、やはりまだ遺構の性格は不明である。

そして、近代の遺構であるが、大正時代に敷設された上水管の溝（SD05）と下水管の溝（SD04）については、本市の水道事業史において良好な考古学的な資料となるであろう。



第11図 溝状遺構の推定復元



第12図 高蔵遺跡における墳墓の分布（■は古墳、□は方形周溝墓）(S=1/5000)

【名古屋市教育委員会 2003『高蔵遺跡』より】

正木町遺跡（第22次）



目 次

第1章 位置と環境	51	第3章 調査の内容	53
第2章 調査の経緯	52	1 基本層序	
1 調査の経過		2 遺構・遺物	
2 作業日誌抄		第4章 まとめ	58

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	51	第5図 埋め戻し完了	52
第2図 調査前状況	51	第6図 遺構平面図	54
第3図 正木町遺跡調査地点図	51	第7図 土層断面図	55
第4図 作業状況	52	第8図 遺物実測図	56

表目次

第1表 遺構一覧	56	第2表 遺物観察表	58
----------------	----	-----------------	----

図版目次

図版 1

- 1 前半区完掘状況（東から）
- 2 後半区完掘状況（東から）

図版 2

- 1 西壁（H-A）断面
- 2 前半区北壁（A-B、C-D）断面
- 3 東壁（D-E、F-G）断面
- 4 P8 断面（南から）
- 5 P3・P5 出土（実測図 1・2）
- 6 P8 出土（実測図 3・4・5）
- 7 P22・P38・P54 出土（実測図 6・7・8）
- 8 遺構検出時・北壁表土出土（実測図 9・10・11）

参考文献

新修名古屋市史資料編集委員会 2008『新修名古屋市史 資料編 考古 1』名古屋市

第1章 位置と環境

正木町遺跡は名古屋市のほぼ中央、名古屋台地から半島状にのびた熱田台地西縁に東西約350m、南北約300mの範囲で標高8～9m付近に立地する。

本遺跡は古墳時代から古代の集落を主体とする、弥生時代から近世まで続く複合遺跡である。本遺跡南側には弥生時代、古墳時代、中世の遺跡である伊勢山中学校遺跡が接しており、さらに南には7世紀中ごろに創建されたと考えられる、奈良時代から中世の寺院跡である尾張元興寺跡が所在する。本遺跡から南東に約500m離れた台地の東縁近くには、北から古沢町遺跡・金山北遺跡・東古渡町遺跡が続いている。

本遺跡では、これまでに名古屋市教育委員会が21度にわたり発掘調査を実施してきたほか、民間の発掘調査会社等によっても調査が行われている。また、令和2年7月13日から令和2年9月4日にかけて本調査地点南東の正木小学校内で名古屋市教育委員会が第23次発掘調査を行った。



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 調査前状況



第3図 正木町遺跡調査地点図

第2章 調査の経緯

1 調査の経過

第22次調査地点は、名古屋市中区正木一丁目1309番3に所在し、正木町遺跡の遺跡範囲の中では北側に位置する。

個人住宅の建設に伴い、令和2年6月11日付け2教文第5-30号で発掘調査の実施を通知した。敷地が狭く堆土置き場を確保するため、東西に分けて西側を前半区、東側を後半区として調査を行った。調査期間は令和2年7月8日から7月29日まで、調査対象面積は38m²である。

敷地中央部と南部では解体重機による搅乱が著しかったが、搅乱を受けていない箇所ではピットが複数確認された。

出土品の量はコンテナケース1箱分であった。

2 作業日誌抄

7月8日(水)	雨のち晴れ	道具搬入。フェンス設置後調査区を設定。
7月9日(木)	雨	前半区表土掘削。午後雨天中止。
7月10日(金)	雨時々曇り	前半区遺構検出・掘削。
7月13日(月)	雨	基準点設置。前半区南側壁面養生。午後雨天中止。
7月14日(火)	雨	雨天中止。
7月15日(水)	曇り	前半区遺構掘削、清掃、写真撮影。
7月16日(木)	晴れ	前半区写真撮影、土層断面図・平面図作成。
7月17日(金)	雨	前半区平面図作成。午後雨天中止。
7月20日(月)	晴れ	前半区平面図作成。前半区埋め戻し。後半区表土掘削。
7月21日(火)	晴れ	後半区遺構検出・掘削、壁面清掃。
7月22日(水)	晴れ	後半区遺構掘削、土層断面図作成。写真撮影。
7月27日(月)	雨	雨天中止。
7月28日(火)	曇り時々雨	後半区土層断面図・平面図作成。
7月29日(水)	曇り	後半区土層断面図・平面図作成。埋め戻し。道具整理。フェンス・倉庫撤去



第4図 作業状況



第5図 埋め戻し完了

第3章 調査の内容

1 基本層序

調査区内の基本層序は、現地表面から地山面（熟田層）までの深さは平均45cmで、上層から表土・撲乱土層・古墳時代から古代の遺物包含層（黒褐色土）の順で堆積している。表土・撲乱土層には土器細片の他、近世以降の磁器片や土管片が含まれていた。古墳時代から古代の遺物包含層には、土師器片・須恵器片が含まれていた。調査区の約半分が解体重機による撲乱を受けているが、影響を受けていない箇所では多数のピットが検出された。なお遺構内の埋土は黒褐色土が多い。

2 遺構・遺物

調査では58基のピットが検出された。多くのピットは無遺物または土器細片が出土したのみであったが、実測に足る遺物から概ね古墳時代から古代の遺構であると考えられる。また、P 57・P 58に関しては、遺構検出時点ではピットであると思われたが、掘削を行ったところピットではなく、地形の起伏によるくぼみであったため、平面図化は行っていない。

P 3

前半区西側、調査区西壁付近で検出。平面形は楕円形で、径は16cm、底面の標高は7.74m。埋土中からは須恵器・土師器が出土した。須恵器は坏蓋（第8図-1）がある。

P 5

前半区西側、調査区西壁付近で検出。平面形は楕円形で、径は42cm、底面の標高は7.51m。埋土中からは須恵器（第8図-2）が出土した。須恵器は口縁部片が出土しており、破片のため断定はできないが、亂かと思われる。

P 8（図版2-4）

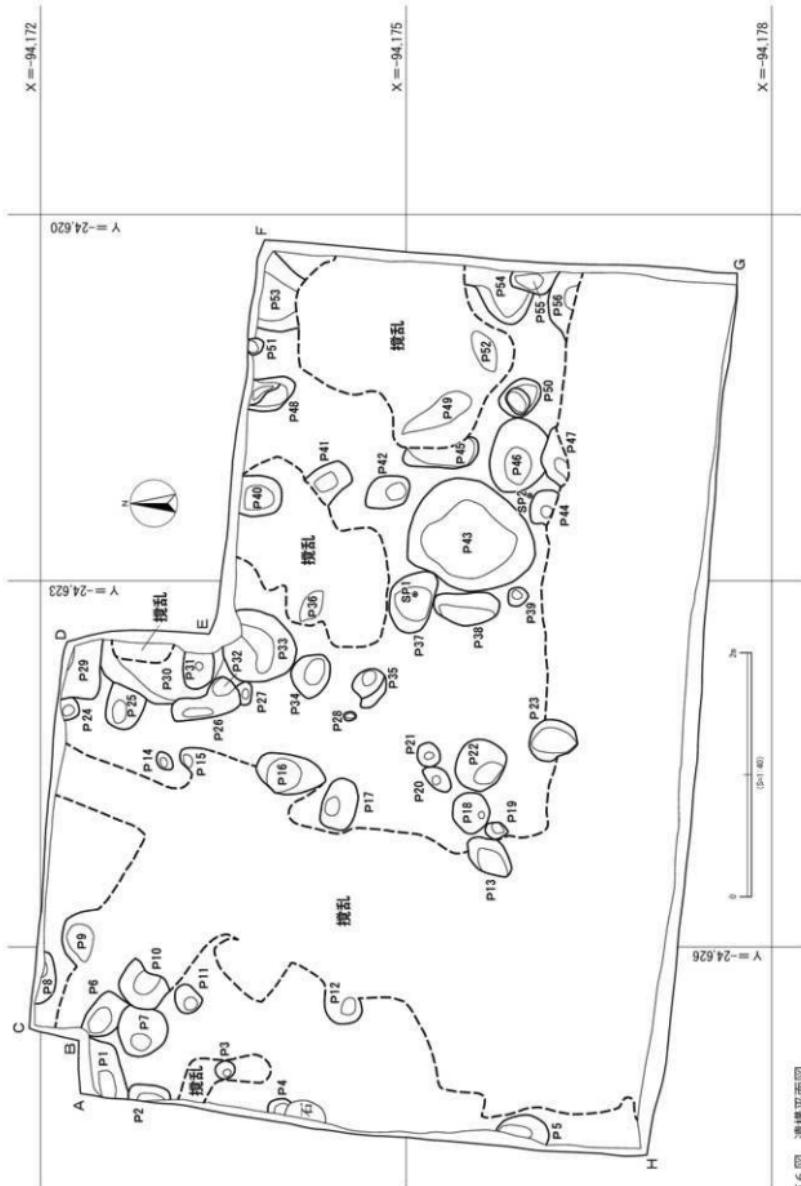
前半区北側、調査区北西壁際で検出。半分調査区外であったため、遺物をすべて取り上げることはできなかった。平面形は楕円形で、径は42cm、底面の標高は7.56m。埋土中からは須恵器・土師器が出土した。須恵器は坏身（第8図-3）・坏蓋（第8図-4）、土師器は小型甕（第8図-5）がある。3は口縁部に自然釉のような光沢がある。5は底部から胴部外面に黒斑があり、外面には縦・斜め方向の太いハケ目が施されている。また、底部には葉脈痕がある。

P 22

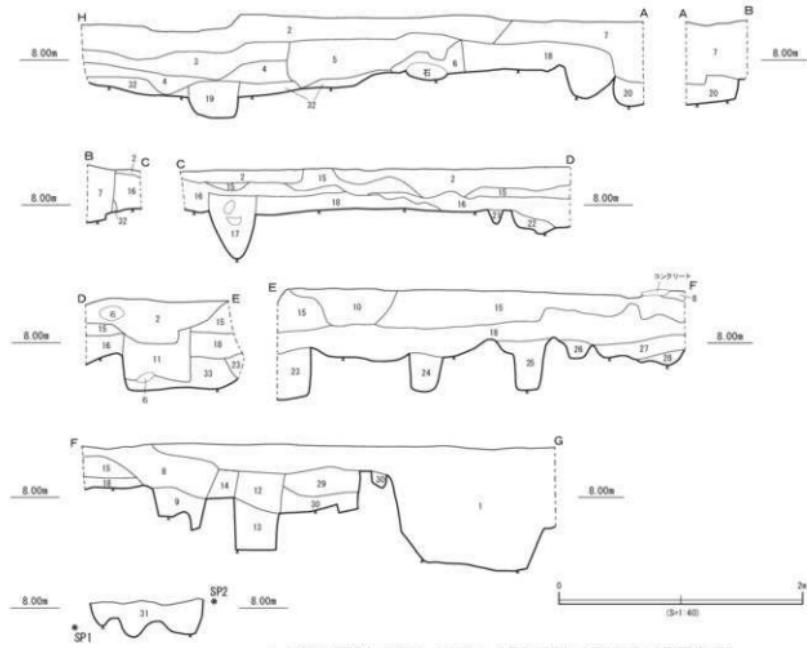
前半区南東側、調査区中央部で検出。平面形は楕円形で、径は42cm、底面の標高は7.5m。埋土中からは須恵器が出土した。須恵器は坏蓋（第8図-6）がある。

P 38

後半区西側、調査区中央部で検出。平面形は楕円形で、径は54cm、底面の標高は7.63m。埋土中からは須恵器・土師器・土錐（第8図-7）が出土した。



第6図 通構平面図



P43 北西 - 南東ベルト西側断面

- 1 T.SYR5/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 土管片・礫岩片・土器細片を含む土管理設時の塊
 2 T.SYR5/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり T.SYR5/6 明褐色土混じる (50%) 近世以降の瓦片少量含む
 3 T.SYR5/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり
 4 T.SYR7/8 黄褐色土 粘性あり しまりあり 上層の土混じる (20%)
 5 T.SYR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 近世以前の礫岩片・土管片含む
 6 T.SYR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりややあり T.SYR5/6 明褐色土混じる (30%)
 7 T.SYR7/8 黄褐色土 粘性ややあり しまりややややあり 黑褐色土と 10cm程度の石混じる
 8 T.SYR2/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり 1cm程度の小石混じる
 9 T.SYR5/3 黑褐色土 粘性ややあり しまり弱い
 10 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性ややあり しまりややややあり 1~4cm程度の小石混じる T.SYR5/8 明褐色土混じる (10%)
 11 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性ややあり しまりややややあり 0.5~5cm程度の小石多く混じる
 12 T.SYR2/4 布褐褐色土 粘性ややややあり しまりややややあり 3~5cm程度の褐色、明黄褐色ブロック混じる (10%)
 13 T.SYR4/4 棕褐色土 粘性あり しまり弱い
 14 T.SYR5/8 明褐色土 粘性あり しまりあり 5cm程度の黒色ブロック混じる (10%)
 15 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性ややあり しまりややあり T.SYR5/6 明褐色土混じる (5%)
 16 10TR2/3 黑褐色土 粘性あり しまりあり 土器細片を含む塊
 17 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり P5 墓土
 18 10TR2/3 黑褐色土 粘性あり しまりあり 黄褐色地山混じる (35%) 包含層
 19 T.SYR2/3 布褐褐色土 粘性あり しまりあり P5 墓土
 20 10TR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 黄褐色地山混じる (35%) P1 墓土
 21 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり P24 墓土
 22 10TR2/3 黑褐色土 粘性あり しまりあり 黄褐色地山混じる (35%) P29 墓土
 23 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 褐黄色地山混じる (35%) P33 墓土
 24 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 褐黄色地山混じる (35%) P49 墓土
 25 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 褐黄色地山混じる (35%) P48 墓土
 26 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 2cm程度の褐黄色ブロック混じる (1%) P31 墓土
 27 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり P53 墓土
 28 T.SYR4/3 棕褐色土 粘性あり しまりあり 黑褐色土混じる (10%) 上層と地山の混じる土 P53 墓土
 29 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 褐黄色地山混じる (35%) 土器細片含む P54 墓土
 30 T.SYR2/2 黑褐色土 粘性あり しまりあり 褐黄色地山混じる (35%) P54_06 墓土
 31 T.SYR4/4 布褐褐色土 粘性ややややあり しまりややややあり 黑色土が混じる (10%) P3 墓土
 32 T.SYR4/3 棕褐色土 粘性ややあり しまりややあり 黑色土混じる (8%)

第7図 土層断面図

P 43 (第7図、P 43北西 - 南東ベルト西側断面)

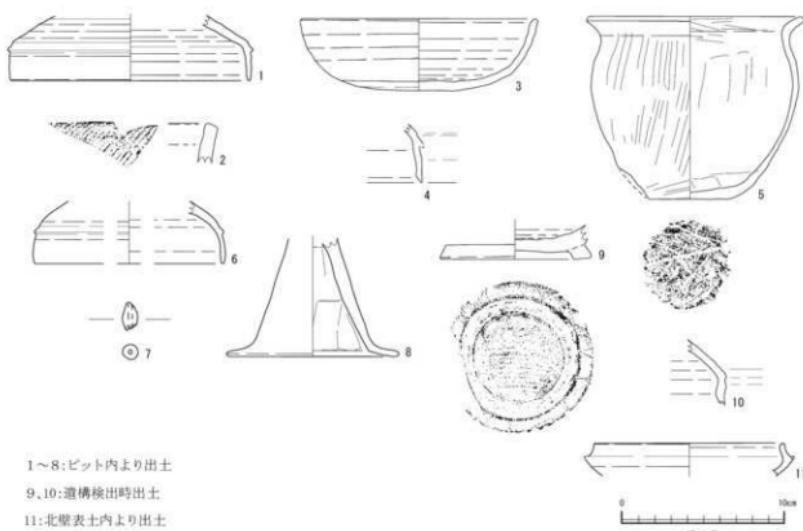
後半区西側、調査区中央部で検出。平面形は楕円形で、径は105cm、底面の標高は7.61m。埋土中からは土師器が出土した。

P 54

後半区東側、調査区東壁際で検出。平面形は不整円形で、径は42cm、底面の標高は7.81m。埋土中からは土師器が出土した。土師器は高環の脚部(8)がある。

その他の遺物

遺構に伴わない遺物として、遺構検出時に須恵器の壺(第8図-9)・壺蓋(第8図-10)、後半区北壁表土から須恵器の環身(第8図-11)が出土している。



第8図 遺物実測図

第1表 遺構一覧

遺構No	最大径(cm)	底面高(m)	出土遺物	備考
P 1	46	7.62		一部調査区外
P 2	35	7.68		一部調査区外
P 3	16	7.74	須恵器(壺蓋など)・土師器	
P 4	16	7.83		一部調査区外
P 5	42	7.51	須恵器(壺か)	一部調査区外
P 6	36	7.63		P 7に切られる
P 7	40	7.46	須恵器	P 6を切る、P 10に切られる
P 8	42	7.56	須恵器(壺身・壺蓋など) 土師器(小型壺など)	一部調査区外

遺構No	最大径(cm)	底面高(m)	出土遺物	備考
P 9	49	7.64		
P 10	39	7.46		P 7を切る
P 11	24	7.60		
P 12	30	7.57		
P 13	43	7.51		
P 14	18	7.80		
P 15	20	7.76		
P 16	58	7.72	土師器	
P 17	42	7.72		
P 18	34	7.62		
P 19	18	7.69		
P 20	27	7.58		
P 21	20	7.59		
P 22	42	7.50	須恵器(坏蓋など)	
P 23	40	7.65		
P 24	20	7.86		一部調査区外
P 25	35	7.66		P 30に切られる
P 26	54	7.68		P 30を切る
P 27	19	7.81		P 32に切られる
P 28	10	7.72		
P 29	50	7.78		一部調査区外
P 30	120	7.76		P 25を切る、P 26・32・33に切られる、一部調査区外
P 31	29	7.60		一部調査区外
P 32	30			
P 33	58	7.55		一部調査区外
P 34	38	7.62	須恵器	
P 35	34	7.58		
P 36	30(下場径)	7.58	須恵器・土師器	
P 37	54	7.66		
P 38	54	7.63	須恵器・土師器・土錐	
P 39	16	7.79		
P 40	33	7.54		一部調査区外
P 41	33	7.53		
P 42	40	7.62		
P 43	105	7.61	土師器	北西 - 南東ベルト土層断面図あり
P 44	28	7.81		
P 45	58	7.63		
P 46	60	7.60		P 47に切られる
P 47	48	7.71		P 46を切る
P 48	37	7.77		一部調査区外
P 49	62(下場径)	7.52		
P 50	36	7.86	土師器	
P 51	14	7.78		一部調査区外
P 52	38(下場径)	7.72		
P 53	64	7.77		一部調査区外
P 54	42	7.81	土師器(高坏など)	P 55に切られる、一部調査区外
P 55	38	7.78		P 54を切る、一部調査区外
P 56	50	7.66		一部調査区外
P 57	—	—	土師器	地形の起伏によるくぼみ
P 58	—	—	土師器	地形の起伏によるくぼみ

第2表 遺物観察表

No	種類	出土位置	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 / 环蓋	P 3	口径 14.6 残存高 4.0	密	良好	外面:灰白 内面:黄白	
2	須恵器 / 瓶か	P 5	残存高 2.5	密	良好	灰	
3	須恵器 / 环身	P 8	口径 14.4 器高 4.4 底径 4.3	密	やや良	外面:にぶい橙 内面:橙	
4	須恵器 / 环蓋	P 8	残存高 3.6	密	良好	外面:黄灰 内面:灰	
5	土師器 / 小型甕	P 8	口径 13.0 器高 11.25 底径 5.6	やや粗 (2mm 以下の 礫多く含む)	良好	外面:灰黄褐 内面:にぶい黄橙	口縁部と肩部 の一部が橙色
6	須恵器 / 环蓋	P 22	口径 11.6 残存高 3.85	密	良好	外面:灰 内面:褐灰	
7	土鍤	P 38	残存長 1.8 外径縦 0.9 × 横 0.95 内径縦 0.28 × 横 0.25	やや密 (1mm 以下の 礫含む)	良好	橙	重さ 1.05g
8	土師器 / 高环	P 54	底径 10.8 残存高 7.3	やや密 (0.5 ~ 1mm の礫含む)	良好	内外面:浅黄橙 断面:灰白	
9	須恵器 / 壺	遺構検出	高台径 9.1 残存高 2.1	密	良好	灰	
10	須恵器 / 环蓋	遺構検出	残存高 4.1	密 (0.8mm 以下の礫 わずかに含む)	良好	灰	
11	須恵器 / 环身	北壁表土	口径 9.0 残存高 2.0	密	良好	灰	

第4章 まとめ

今回の調査地点では、調査範囲の約半分で解体重機や土管理設の際の撹乱を受けていた。大きな撹乱を受けていない箇所については概ね 20cm 程度の厚さで遺物包含層が堆積していた(第7図 18層)。遺構としてはピットを 58 基検出したが、無遺物または土器細片のみの出土が多く、遺構の性格は詳しくは分からなかった。しかし、実測に足る出土遺物から、包含層及びピットはおおむね古墳時代から古代にかけてのものであると考えられる。



1 前半区完掘状況（東から）



2 後半区完掘状況（東から）

図版 2



1 西壁 (H-A) 断面



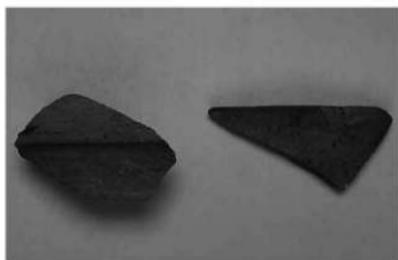
2 前半区北壁 (A-B、C-D) 断面



3 東壁 (D-E、F-G) 断面



4 P8 断面 (南から)



5 P3・P5 出土 (実測図 1・2)



6 P8 出土 (実測図 3・4・5)



7 P22・P38・P54 出土 (実測図 6・7・8)



8 遺構検出時・北壁表土出土 (実測図 9・10・11)

春日野町遺跡（第6次）



目 次

第 1 章 遺跡の位置と環境	63
第 2 章 調査の経過と方法	64
(1) 調査に至る経緯	
(2) 調査の経過	
第 3 章 調査の成果	67
(1) 調査地区の状況	
(2) 遺物	
第 4 章 まとめ	68

挿図目次

第 1 図 調査地点	62
第 2 図 遺跡分布図と既往の調査地点	63
第 3 図 調査区平面図	65
第 4 図 調査区北壁・東壁土層断面図	66
第 5 図 出土遺物実測図	67
第 6 図 近代の春日野町遺跡周辺	68

図版目次

図版 1	69
写真 1 調査前状況	
写真 2 表土掘削状況	
写真 3 調査状況	
写真 4 調査区北壁（東側）	
写真 5 調査区北-東壁	
写真 6 土管検出状況（南から）	
写真 7 土管検出状況（北から）	
写真 8 調査区全景（南から）	
図版 2	70
写真 9 調査区全景（北から）	
写真 10 出土遺物（1）	
写真 11 出土遺物（2）	
写真 12 出土遺物（3）	



第 1 図 調査地点 (1/25,000)

第1章 遺跡の位置と環境

春日野町遺跡は、名古屋市域の中心部を占める名古屋台地の南東端、通称笠寺台地と呼ばれる洪積台地上に所在する。遺跡の範囲は名古屋市上下水道局春日野配水場とその南側の住宅地となっており、かつては春日野配水場遺跡、春日野南遺跡の2遺跡に区別されていた。周囲には見晴台遺跡、扇田町遺跡、桜台高校遺跡など弥生時代以降を中心とした遺跡が数多く分布している。また、中世には台地上に多くの城館が築かれ、春日野町遺跡でも大規模な溝跡が確認されている。

春日野町遺跡の発見は戦前にさかのぼり、昭和17(1942)年、春日野配水場における工事の際に北村斌夫氏によって弥生土器等が採集されている(三渡・飯尾1969)。また、昭和35(1960)年の工事の際には、三渡俊一郎氏が竪穴住居の断面を発見している。

名古屋市教育委員会では、個人住宅の建設等に伴い、平成6(1994)年以降5回の発掘調査を行っており、今回の調査が第6次調査にあたる。調査地点は遺跡の南西端に位置し、南は見晴台遺跡、東は桜田貝塚・貝塚町遺跡に隣接している。



第2図 遺跡分布図と既往の調査地点

第2章 調査の経過と方法

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、名古屋市南区貝塚町 11 番 9、60 番に個人住宅建設を計画したことに端を発する。令和 2（2020）年 6 月、名古屋市教育委員会が試掘調査を実施した。8 月 27 日に事業者から文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出の提出があり、9 月 24 日、敷地内の約 50m²について、発掘調査が必要となる旨を通知した。調査は令和 2 年 10 月 12 日から行われた。

(2) 調査の経過

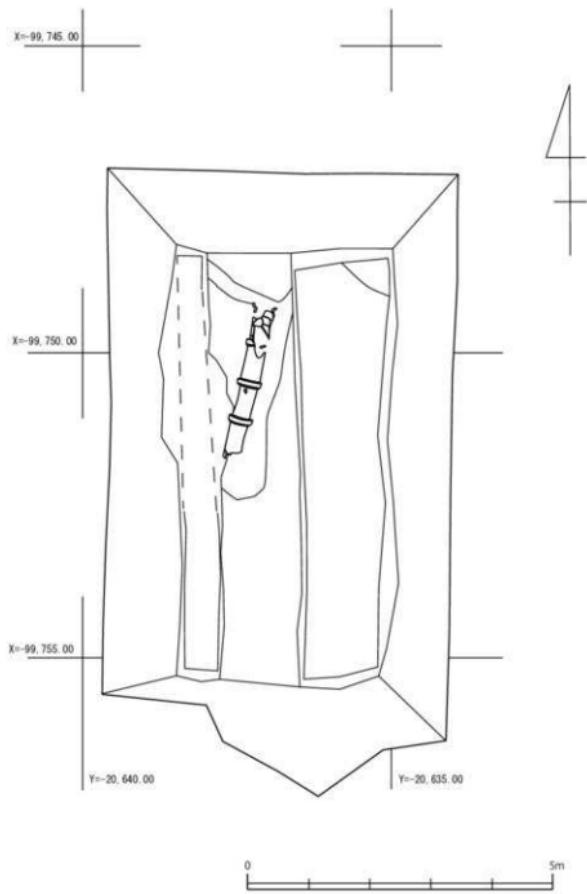
試掘調査の結果から、現地表面から -2 m 以下に及ぶ深い掘削が想定されたため、調査区の周囲に幅 1.1 m の安全勾配をつけて掘削を行った。また、建設する建物の地盤に影響を与えないよう、住宅基礎の予定深度までの掘削にとどめている。

北側から表土掘削を行った。調査区の北東端では、地表面から 70 ~ 90cm ほど掘削したところで橙褐色砂質シルトの堆積が確認された。この層は熱田層（地山）の土に似ていたが、南西側に掘削が進むにつれ、この層の下に近代の土管が埋設されている状況が明らかになってきた。層の前後関係を把握するため、面的な掘削を一時中断し、試掘調査実施時のトレーニング部分を掘り下げて確認を行った。その結果、地山とみられた橙褐色土層の下に整地土、溜池の埋土とみられる水分の多い土が堆積していた。

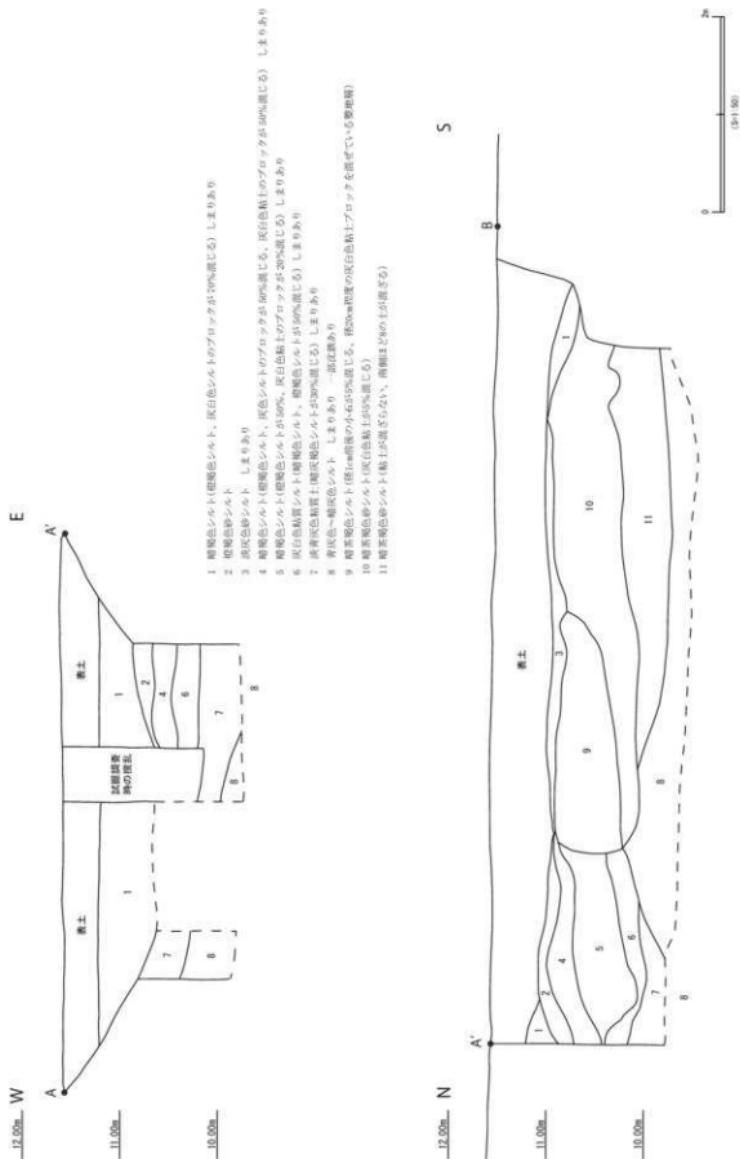
調査区の西側にサブトレーニングを設定して掘削を行ったところ、こちらは整地土をあまり挟まず、地表面から -1 m 程度で溜池の埋土とみられる土が堆積していた。近代の土管を検出した部分を残して、調査区東側も掘削を行ったが、制限深度まで同様の状況であった。埋土が非常に柔らかく、調査途中に西側の壁面が崩落するなど、これ以上掘削を続けるのが危険であること、埋土に遺物がほとんど含まれないことから、土管検出部分を残して記録作業を行い、調査を終了することとなった。

調査内容は以下の通りである。

- 10月12日（月）・・・重機等搬入。調査区設定。表土掘削。
- 10月13日（火）・・・基準点測量。調査区掘削。壁が崩れてきているため、清掃し現況写真撮影。
- 10月14日（水）・・・壁面清掃。写真撮影。
- 10月15日（木）・・・調査区内清掃、写真撮影。
- 10月16日（金）・・・平面図・断面図作成。遺物取り上げ。埋戻し。
- 10月22日（木）・・・調査道具等撤収。終了確認。



第3図 調査区平面図 (S=1:80)



第4図 調査区北壁・東壁土壌断面図

第3章 調査の成果

(1) 調査地区の状況 (第3図、第4図)

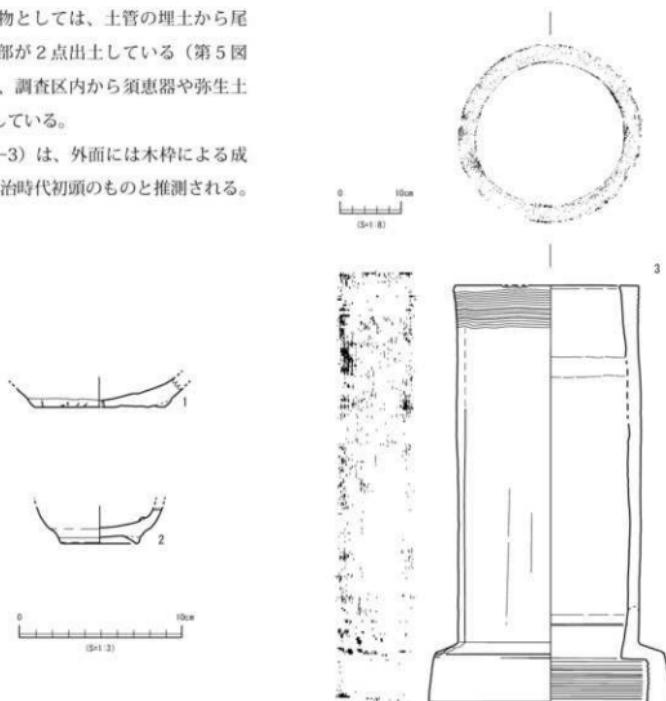
地表面より約40cmまでが表土で、以下に比較的新しい整地土（1～3層）を挟んで、調査区北側では最大-1.8mまでブロック土を含む暗褐色シルト、灰白色粘質シルト、青灰色粘質土で造成されていた（4～7層）。以下は鉄分の沈着した青灰色～暗灰色シルト（8層）であった。この層から湧水があり、溜池の底にあたると考えられる。調査区北壁際の湧水点付近では、7～8層の境界にワラや木の枝などの有機物が多く埋められており、整地に伴うものとみられる。調査区南側には耕作土とみられる暗茶褐色シルト（10・11層）が堆積していた。

調査区中央北よりには、5層・9層まで掘り込むかたちで4個体の土管が埋設されていた。

(2) 遺物 (第5図、写真10～12)

図化できる遺物としては、土管の埋土から尾張型山茶碗の底部が2点出土している（第5図-1・2）。ほかに、調査区内から須恵器や弥生土器の小片も出土している。

土管（第5図-3）は、外面には木枠による成形の跡が残り、明治時代初頭のものと推測される。



第5図 出土遺物実測図

第4章 まとめ

今回の調査地点は、大部分が溜池となっており、中世までの住居跡や溝跡などは確認できなかった。この溜池は明治時代前半の測量図（図6）や地籍図などにみられる溜池と同一のものと考えられ、調査地点周辺の丘陵は、遅くとも近世には水田や畠地となっていたようである。

調査地点は春日野町遺跡の中心部から、丘陵が下っていく部分にあたり、谷を挟んだ南側には見晴台遺跡が所在する丘陵がある。溝などの遺構こそ確認できなかったものの、中世以前は集落と集落を隔てる地点となっていたと推測される。低地における土地利用の変遷を考えるにあたっては、興味深い成果が得られたといえるだろう。

参考文献

- 三渡俊一郎・飯尾恭之 1969『南区の原始・古代遺跡』名古屋市教育委員会
名古屋市見晴台考古資料館 2005「春日野町遺跡（5次）」『埋蔵文化財調査報告書 51』



第6図 近代の春日野町遺跡周辺（明治26年発行「熱田」：国土地理院提供より、1:15,000）



写真 1 調査前状況



写真 2 表土掘削状況



写真 3 調査状況



写真 4 調査区北壁（東側）



写真 5 調査区北一東壁



写真 6 土管検出状況（南から）



写真 7 土管検出状況（北から）



写真 8 調査区全景（南から）

図版 2



写真 9 調査区全景（北から）



写真 10 出土遺物（1）

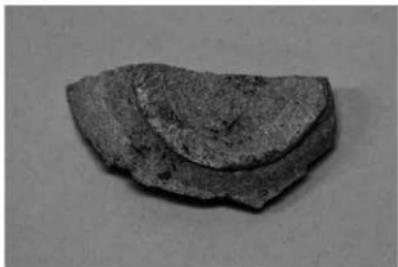


写真 11 出土遺物（2）



写真 12 出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	高蔵遺跡（第61次・第62次）正木町遺跡（第22次）春日野町遺跡（第6次）
巻次	92
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	109
編著者名	安田彩音 片桐妃奈子 林順 水野裕之
編集機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL(052) 972-3269 FAX(052) 972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL(052) 972-3269 FAX(052) 972-4202
発行年月日	西暦2021年（令和3年）9月30日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町202番2	23100	12-2	35°13'73"	136°90'36"	2020年6月29日～ 2020年7月30日	44	記録保存 調査
高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町202番2	23100	12-2	35°8'14"	136°54'12"	2021年1月25日～ 2021年2月27日	53	記録保存 調査
正木町遺跡	名古屋市中区正木1丁目1309番3	23100	7-19	35°15'08"	136°89'64"	2020年7月8日～ 2020年7月29日	38	記録保存 調査
春日野町遺跡	名古屋市南区貝塚町11番9、60番	23100	15-29	35°06'01"	136°56'25"	2020年10月12日～ 2020年10月22日	50	記録保存 調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高蔵遺跡	集落跡	古墳～中世	土坑、溝	須恵器、土師器、灰釉陶器	第61次調査
高蔵遺跡	集落跡	縄文、弥生又は古墳、中世	土坑、溝状遺構	縄文土器、須恵器、山茶碗	第62次調査
正木町遺跡	集落跡	古墳・古代	ピット	須恵器、土師器	第22次調査
春日野町遺跡	散布地	中世～近代	溜池	山茶碗、土管	第6次調査
要約	高蔵遺跡は、熱田台地南端近くの東線部に所在し、第61次・第62次の調査区はいずれも遺跡中心部や北寄りに位置する。第61次調査では、方形周溝墓あるいは古墳の周溝と考えられる溝や多数のピットなどを検出したほか、わずかではあるが、溝内の埋土や包含層から須恵器や灰釉陶器、山茶碗などを検出した。第62次調査では、縄文時代の土坑1基が検出され、縄文土器片1点が出土した。正木町遺跡は熱田台地の西線に位置し、古墳時代から古代の集落を主体とする弥生時代から近世まで続く複合遺跡である。個人住宅の建築に伴い発掘調査を実施し、須恵器片・土師器片のほか多数のピットを検出した。春日野町遺跡は笠寺台地上に所在し、周辺には弥生時代以降の集落遺跡が数多く分布している。個人住宅建築に伴う発掘調査の結果、近世以降の造作と考えられる溜池を検出した。また、明治時代の排水施設に伴うとみられる土管が出土した。				

名古屋市文化財調査報告109
埋蔵文化財調査報告書92
高蔵遺跡（第61次・第62次）
正木町遺跡（第22次）
春日野町遺跡（第6次）

2021年9月30日発行

編集 名古屋市教育委員会文化財保護室
TEL (052) 972-3268
発行 名古屋市教育委員会
印刷 西濃印刷株式会社